

4600

大
4
418

中華民國二十一年四月九日

第 9

內閣信編輯



豐詩歌

開文堂鑄

特63

新体詩歌序

古人云フ蛙モ亦歌仲間ナリト善哉言ヤ夫レ人喜悲哀樂ヲ感
 スル者アレバ則チ必ス之ヲ其口ニ發ス其發スルヤ流暢音律
 アル白歌ナリ彼ノ詩三百篇亦只口ニ發スル所兒童モ謠ヒ婦
 女モ和ス何ソ別ニ謂ハレアランヤ西洋諸國ノ詩ニ於ケル亦
 然リ其平常用フル所ノ語ヲ以テ其心ニ感スル所ヲ述ベ而シ
 テ之ヲ歌フ耳我國ト雖モ往古ニ在テハ其平常用ル所ノ詞ヲ
 以テ歌ヲ作りシナリ今時ニ至テハ則チ然ラズ詩ヲ作レハ漢
 語ヲ用ヒ歌ヲ作レハ古語ヲ用ヒ苟モ平常用ル所ノ言語ノ其
 中ニ在ル有レバ俚俗鄙ム可シトシテ而シテ探ラズ遂ニ今
 日ノ歌ナル者ハ學者社會ニノミ行ハレ而シテ其他ニ至テハ容
 易ニ之ヲ知ル能ハサルニ至ル豈ニ謬見ト云ハサルベケンヤ
 蓋シ國ノ次第ニ開明ニ赴クニ從ヒ交通ノ日々ニ繁劇ナルヨ
 リ各地ノ言語ハ各地ノ事物ト同シク其内國ニ混入シ漸ク平
 常人ノ用フル所トナル即チ之ヲ其國ノ言語トシテ差支ナキ

二

等也詩ニモ歌ニモ用ヒテ妨ナキ理ナリ然ルニ彼ノ謬見者流ハ開明ノ運轉スル所以チ知ラズ苟モ歌ト云ヘハ古言ヨリ外ハ用フルト成ラヌ様ニ云ヒナセリ此ノ如シハ事實ニ於テ不都合チ生スルトモ少カラサルベシ假令ヘバものゝふの弓矢ト云フ可キモ今時ハ「スナイドル」ヲ擔フナレバものゝふの「スナイドル」ト云ヒタリトテ差支ナキ筈ナリ而ルモ是非ニ弓矢ト云ハチバナラヌトスルハ事實ニ於テ不都合ナラズヤ之ハ是レ「スナイドル」ト云フ詞已ニ國言トナリシチ解セサルノ謬也若シ夫レ古言雅言ヲ以テ長歌短歌ヲ並ブルモ其平生ニ用ヒサルノ言語ナレバ殆ド外國語ヲ以テ歌ヲ作ルノ思ヒ有テ十分ニ已ガ情懷ヲ寫シ出スチ得サルノ憾ナキ能ハズ古語ハ古代ノ通言ナリ今言ハ今代ノ通言ナリ古人ハ古ノ語ヲ以テ作ル今人ハ今ノ語ヲ以テ作ル何ノ妨カ之アラシテ故ラニ小六ヶ敷古書杯ヲ捨クルハ實ニ笑フ可キ至リチラスヤ余此說ヲ持スルト久シ頃者竹内君新體詩歌ノ編アリト余ニ其序ヲ請ハル余夙ニ茲ニ志アリ故ニ樂ンテ而シテ之ヲ言フ明治十五年八月新橋橋居ニ於テ

屈山小室弘識

緒言

- 一 此編數首泰西之名家シエーキビーヤ氏之原撰而我國洋學家之係于翻譯
- 一 誠忠遺訓外二三首者我國固有之長歌也
- 一 又長歌中撰者姓名等属于漫然者有一二首今不暇檢正讀者幸諒之
- 一 此編不言古今體詩歌言新體者新體以居其八九也亦不言詩撰而言詩歌者在彼言箴在我言歌其理同也觀者莫爲異以焉
- 一 編中僅々評語其不附者他日爲有所請諸先輩

明治十五年八月

嶮谷 竹内節 識

三

四

新体詩歌第一集

目次

○楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓之歌○月照の入水を悼みて讀める歌○舞曲よ擬して作る歌○自由の歌○顯理四世を讀める○ハムソット●玉の緒の歌●抜刀隊○花月の歌○ウルゼー○大佛よ詣でゝ感あり
以上十二篇

新体詩歌第二集

目次

●勸學の詩○春夏秋冬の詩●カムフヘル氏英國海軍の詩●シヤール ドレアン氏春の詩○西詩和譯○刺客を詠するの詩○外交の歌○俊基朝臣東下り○藤袴の歌○小督の歌○東の花○長恨歌○櫻狩○芙蓉を詠するの歌○西行の歌
以上十五篇

新体歌詩第三集

目次

●テニソン氏輕騎隊進撃の詩○朝貌の花よ寄せて學童を奨勵す○題秋(西詩和譯)●ロンヅフェロー氏人生の詩●ロンヅフェロー氏兒童の詩●社會學の原理よ題す○遊墨水歌○詠和氣公清麻呂歌
以上八篇

新体詩歌第四集

目次

●虞禮氏墳上感懷の詩○小楠公を詠するの歌○代悲白頭翁歌○寒村夜歸○西詩和譯○詠史○吊忠魂歌
以上七篇

新体詩歌第五集

目次

○世渡りの歌○夏夜即事○送學友歸郷歌○見燭蛾有感○湘南秋信●チャールズ・キングスレー氏悲歌○詠松島歌○佐

五

六

久間象山謫居の歌○西市の役より凱陣せし人を祝するの歌
○詠石菫歌
以上十篇

新体詩歌

小室眉山校閱
竹内 節編輯

○楠正成櫻井驛よ於て正行へ遺訓の歌

建武の昔正成ハ肌の守りを取出し是ハ一歳都攻めの有りし時下し給ひし諭旨なり之を汝よ與ふるなり。余ハ兎に角よなるあらば。世ハ尊氏の世となりて。敵慮を惱し奉らんハ鏡よかけて見るが如し。さハ去り乍ら正行よ父の子ならむ流石よも。忠義の道ハ兼て知る。弓張月の影暗く。家名を汚せと勿れ。打洩されし涙黨を。あハれみ扶助し隱家の吉野の山の奥深く。月の桂ハ漣さざなみや。流れも清き菊水の。旗を

再び翻へし敵を千里小逐ひ退けて。敵慮を安んじ奉れ。嗚呼敵慮を安んじ奉れ

○熊谷直實曉ハ教盛を追ふの歌

抑も熊谷直實ハ。征夷將軍頼朝公の御内よ。關東一の旗頭。智勇兼備の大將と世にも知られし勇士なり。左れば元暦元年の頃源平須磨の戦ひよ。功名ありし物語り。聞くも中々あわれなり。その時平家の武者一騎。沖なる船よ後れしと。駒を浪間よ打入れて。一丁許り進みしを。扇を揚げて呼び戻し互よしのぎを削りしが。見れを二八の御顔削。花も粧ふ薄化粧。涅齒かねくさく黒々と附け給ひ。斯るやさしき打扮よ。君ハ如何なる御方や。名乗り給へとありければ。下より御聲爽かよ我こそハ參議經盛の三男。無官の太夫教盛ぞ。早々首をうたれよと。西よ向ひて手を合。流石にたけき熊谷も。我が子の事まで思ひやり落つる涙ハと。まらず。鎧の袖よ絞りつ。是非なく太刀を振り揚て。南無阿彌陀佛の聲諸共よ。首ハ前

七

にぞ落ちよける。無残や花の苦さへ 須磨の嵐よ散よけり。
之を菩提の種として 永々跡を吊ひ申さんと。御なき體よ言
ひ遺こし 青葉の笛を取添へて。八島の陣へ送しハ 實ふな
さけある武夫の。心の中うあへれなりその身ハ遂よ蓮生法
師と名のりつゝ、都よ登り元祖大師を師と頼み、剃髮禪衣の
身と成て 晝夜念佛息らき、目山度往生一給ひけり

○月照僧の入水をいたみて讀める歌

平野次郎國臣作

花の都も秋ハ猶。夕ふべ淋しき風情をり名ハ流れしる清水
や。落ち來る瀧の乙羽山 秋の葉色の薄ことよ。散るや紅葉
のちりくくと 亂れゆく世の浪花江や。蘆のさはりの繁くと
も 猶世のためよ身をつくし。盡くさんとても筑紫瀧 波影
の岸の沈ならぬ。探をいつか深緑 色は替らぬ青柳の。驛路
を越て香椎瀧 たゝの橋を打ち渡り。千代の松原千代かけて
萬代かけて君が世の。千ト歳の松よよそへつゝ、神に歩みを

霜崎の。社にかけし四ッ文字の 華の主をよく問へば。延喜
の帝畏しこくも 御手ををせ下しませりつゝ。爰もむかしは石
疊み 重ねくし白浪の。よせし昔一忘れじと 恨み浦半の
片襪。かけて歎くも憐れなり 沾衣塚の沾衣。吾身よ着たる
心地せりやがて博多の假住居。こゝも浪風さハがしく 又
行く方は薩摩瀧。沖の小島にあらぬども 心細くも都よて。
誰らあハれと思ふらん たよるハ心筑紫瀧。一人の外に打あ
けて 語ふ人も浮き枕ら。波路へだて、野間の關屋の關守に
せきとめられて又舟よ 乗るも夫と寄あたよ。波よゆられて
行く先ハ 黒の瀬戸てふ名もろーや。傾て鹿兒島かこの鳥
つばさ縮めて潜みしが。又木枯の風とがどちきて 日向を指
して船出せし。日ハ神無月望の夜の 傾く月と諸共ふ。照り
かがやきてくもりなき 身ハ大君の爲よとて。爰よ一人の薩
摩瀧 いかある縁よ一前の世よ。契も深き船の沖 底の藻屑
とまりぬるを。乗合人も船人も 權の取も路程も。さりとて

知らぬ白浪の 立ちさつらびも甲斐なき。 橋東雲の明鴉
なくより外なかりけり

○舜曲擬して作る

久坂國武作

世のかりきと乱れつゝ。赤根さす日もいとくらく 蟬の小川
よきりたちて。隔ての雲となりよけりうらなましや玉きわ
る。内裡は朝暮とのめせし 實美朝臣よ季朝卿。壬生澤四條
東久世 其外錦小路殿。今うき草の定めなく 旗よしあれを
駒さへも。進み兼てぞいをりつゝ、降しく雨の絶間なく。涙
よ袖に滲りて、是より海山麓芳原露霜わけてあしかする
浪花の浦よたく鹽の。からき浮世のものかへと行ろんとす
れば東山峯の秋風身よしみて 朝多少なよ聞なれし。妙法院
の鐘の音へなへて今宵のあへれなり。何時しか暗き雲霧を
つらみ盡して百敷の都の月をしめ給ふらん

○自由の歌

小室 屈山

天よの自由の兒となり。地よの自由の人とらん 自由よ自由

やよ自由。汝と我れとその中へ 天地自然の約束す。千代も
八千代も末かけて 此世のあらん限りまで。二人が中の約束
をいかよを仇よ破るべき。さはさりながら世の中へ 月よ
村雲花に風。まゝにならぬ人の身を 話せば長いとあがら
古し羅馬の國と聞く その人民を自由よし。共和の政治を立
てんため 數多の人のうき苦勞。それをも知らで慾のため
我權勢を張らんとて。再び帝位よ昇らんと 企てたりしセサ
ルへ。その親友の手より、り 議員の中に殺されたり。その
親友のいふことよ。民を奴隸になさんより。寧ろセサルを殺
さばや 我の羅馬を愛する。親友よりも甚し 羅馬の民の
望みなら。我身も茲よ諸共小 捨る命のいと易し。佛蘭西國
のルイス帝 自由を厭制なさんとて。種々よ手段を廻せど
邪道のいかに正道よ。打ちかつことなるべきが 民の怒りの
火の如く。又洪水の溢れ來て 岩をも碎く勢ひよ。いと畏く
も帝王の 黄金をかざす冠の。断頭機械の上に落ち あはれ

へかなくなりけるハ 誰を怨みん壓制の 自業自得といふべ
 けれ。英吉利國の革命も同じ車の一ツ轍なま 昨日の王ハ今日の
 賊 コロンウェルが手ヲ持ちし。自由の旗の招きよハ 天を
 も回らそ計よて。チャールズ王を誅戮し 自由の基を立てた
 りき。北亞米利加の合衆國 もと英國の民なれど。其發端を
 たきぬれば 自由の人となりこさよ。故郷の名残も氣も止め
 せ 深山荆棘ハまだ愚か。人のふみてしともなき あを海原
 を打ち渡り。見も知もせぬ亞米利加へ 殖民なせし心根ハ。
 いかよあハれよ思ふらめ 然るに猶も英吉利の。はだしの綱
 と離られき 暴君汚吏の壓制よ。請り請りて國の爲め 義兵
 を擧ぐるときからよ。我後れじと親も子も 死ぬる覺悟で七
 年の。長の月日の攻め守り 遂に敵をば追ひ拂ひ。日出度立
 てし獨立國 ワシントンの名よ負へる。都と共よ榮へゆく
 國のはまれや勇まし。嗚呼彼と云ひこれと云ひ 自由の爲
 小ハ昔より。幾多の人の生き別れ 又死にわかれするものを

我東洋の人ぢやとて 土地よかわりのあるをれど。なごか心
 よ變るべき人の自由といふものハ。天地自然の道あるぞ
 つとめよ勵め諸ひとよ。屈卑の民と云ハるゝな 余此文をか
 きかハる。時しも春の夢枕 眠をさませ鐘の音の。いともさ
 やかに聞へける

○ヘンリー四世

外山正一譯

ヘンリー四世その初ランカストルの「チヴック」たり一旦謀
 反企て。六万人の將としてリチャルド王と戦ひて。王を
 俘小なしたれば自から立て王となり四方に逆威を震るひ
 しも皇天いかで乱臣を安穩よして置くべきや禍乱交も起
 り立ち戦争止む時更にあぐウェルス人の蜂起せリスコツ
 ト人の責め入れリヘルセー一家叛逆を。王を暗殺謀るも
 のその數いとも多りき。議員の權理を打ち守り王よ烈
 しく抵抗を財政最とも困難し王ハ人望失ひて。健康漸く
 衰へてその晩年に至りては。自から悔ゆるその惡事。心で

心責められて。安眠とての片時もなすとあらぬ苦しきよ。
此一篇のこれぞ是れその有様とらうつしたる。シエキビ
ールの名作ぞ廣き世界のその中よ。王者の敷は多けれど
ヘンリー四世ならざるの。戀人ありや聞まほし

いと下賤なる我人の。枕を高く高いびき。今も睡るその敷
の。幾千万もあるならん。嗚呼うらやま。羨し。眠るの神よ
眠り神。天より我よ賜りて。伽することそ云ふべけれ。如何
なる罪のたゞりや。眠の神よ見のあされ。たとへ暫時の間
たりとも。胸のくるしき忘れたまふたを閉て眠らんと。い
かにすれども眠られず。そも如何なれを眠神。見る影もなき
あばら家のくすばりかへる藁の床。むさくるしきもいと
すよ。心地もよびは横り。枕のほとりバマ〜と。飛び來
る虫の羽音さへ眠りを誘ふ助すや〜眠るものあるよ。伽
羅沈香をたきこて、床の上なる天蓋の。金襴緞子もて作り
眠を誘ふ樂の音の。いと心地よく聞ゆる。貴人高位の閑まで

の。何とて來ることのなき。びよ愚かある神ぞらし。何故に
斯く見苦しき。不潔な床よ横る。下賤なものと寝のする
も。王者の床よ來らぬぞ。金の時計と號鐘と。比べの者よ
ならぬのを。へていぶかしき神の意が。ゆる〜ゆる、帆柱
の。高き上よも安くねる。水夫の目をば閉さして。あさげ用
捨も荒浪や。吹き來る嵐凄じく。うづまく浪をまよあけて
天地とどろく浪音の。死人もさむる程なるよ。下の無間の地
獄なる。高き柱のその上で。浪よゆらめき眠らざる。神の力
ぞ不思議ある。惣身水よひこされて。身を粉よくたく。水夫よ
の。かくさのがしき其折も。眠るの神の付き添ふよ。草木も
眠る丑滿時眠を誘ふその工夫。手を替品をかゆるとも。王者
の側心來らぬの。依怙最負ある神よこそ。あゝ幸多き賤が身
の。寝ろやねむれや羨し。つらく〜思ひ合されば。冠り着る
る頭ほど。苦しきもの。の世にあらむ

○ハムレット

井上哲次郎 譯

ながらふべきか但し又。ながらふべきふ非るか 愛が思案の
しどころを運命いろよ拙きもこれよ堪へるがまきとをか。
又さのあらで海よりも 深き遺恨よ手向ふて。之をいらまら
ものふか とも心よ落かぬる。扱ても死なんか死ぬるの
の 眠ると同く眠る間。心痛のみか肉体の あらゆるうき
め打捨つ是が望のつてならんア、しぬねむるねむる時。若
しも夢とるとあらまハアこたわりが有様ぢや。なぜと云ふ
よ死よねむり 無常の風よまそつれて。此は婆離れしもの、
ふとも如何なる夢の來るやら。ハテ疑ひの晴れぬもの。うき
と長く忍ぶのも。これが爲かな、せならば 九寸五分さへも
ちたれば。其切先きで一、つきよ 事をすまをもやすければ
之をば爲さき慎みて 強者の非道世のそしり。騙れる人の
さかしめ 思ふ美人の不深切。緩みすぎたる國の法 貴人の
無禮又ととへ。下人とならま善とでも 輕しめらるる之を是
れ。堪へ忍ぶの何故ぞ 重荷を負ひて汗流し。うい目つら

い目こらへつゝ暮らせぬくらし暮らさるものも。亦何故ぞ是の
みち 死後の恐が有からぢや。死出の山路の不思議なる 登
てかへる人ぞなき。如何なるとのあるやらん 物をてくこそ
思へるれ。たとへ此世よ止まりて うき艱難をまむるとも。
夢の世のといふそろしや

○井上巽軒曰。畏死之情述得精妙

かくと心よ思ふ故。たげき心も懸くなり 如何なる深き大望
も。花もひらかま枯うせて 實のなることをなり 危左のさり
あがらオヒリヤよア、たをやかなその風情 そなこの神を
禱るならわーが罪障わびてたべ

○玉の緒の歌

井上哲次郎 譯

眠る心やしぬるなり。見ゆる形はおぼろまり あすをも知ら
ぬ我命。あわれのかなき夢がかしきととあわれよいふの悪
し。我命こそまことなれ 我命こそたしかなれ。墓のかり
の場所ならき 人の塵にて又散ると。いふのからたの上のこ

人の願ひの喜びか。人のねがひの悲みか。人の願ひこれ
 ならず。唯怠らぬ働きて 今日よりまさる明日をまて。業の
 久しく時の馳す強き胸だも亦たへず。鼓の如く打ちつづけ
 一日くくと近くなる。死出の旅をば速すなるあらそひ多き
 世の中よ 此身をよせてさきかけよ。なりてますく進むべ
 し言なき唾となる勿れ。率る牛となる勿れ 如何よ未來
 は樂しきも。いかに空しき過去なるもともよこれをば捨て
 置きて。われを忘れぬ神をしり いたらくべきの今日ばかり
 すぐれたる人世よ多し 我れとても人相同じ。勉めればめば
 斯くならんゆめ怠らぬ務めなば。長く残さん此名をば海よ
 り荒き世の中よ。舟失ひて浪の間に 獨り漂ふ我友の。我名
 をききて勇まなん 我名をききて進まなん さすれば人の氣
 を張りて。事業のかりよ心して如何なる運もととせき。高き
 よ至れ馳せゆけよこのしみあるを働けよ

○弘云詞句精巧押韻自在敬服々々

○拔刀隊

外山正一作

我の官軍我が敵の。天地容れざる朝敵を 敵の大將たるもの
 は。古今無双の英雄を 之よ従ふつもの。ともよ慥悍決
 死の士鬼神よのちぬ勇あるも。天の許さぬ叛逆を 起せし
 もの。昔より。業へしたためしのあるざる敵の亡ぶる夫ま
 でハ進めやまずめ諸共よ 玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟
 で進むべし 皇國の風ともものふの。其身を護る靈の 維新
 このかゝすたれたる。日本刀の今更よ 又世にいづる身のほ
 まれ。敵も身方も諸共よ 刀の下よ死すべきぞ。大和だまし
 いあるものハ 死べき時の今なるぞ。人よあぐれて恥かくな
 敵の亡ぶる夫までハ。すゝめや進めもるをもに 玉ちる劔ぬ
 き運て。死ぬる覺悟で進むべし 前を望めを劔なり。右も左
 も皆劔つるさの山に登るのハ。未來のことと聞つるに。此
 世よ於てまのあたり。劔の山よ登るのも 我身のあせる罪業
 を。はらばされためよ非ずして 賊を征伐するがため。劔の山

も何のその敵の亡ぶる夫まで。進めや進め諸共よ玉ち
 る劔ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし劔の光りひらめく
 は。雲間に見ゆる稲妻が。四方より打出せ砲聲の。天よとどろ
 く雷ぞ。敵の又小伏すものや。丸も砕けて玉の精の。絶へて
 いかなく死する身の。屍の積て山をなし其血の流れて川を
 なす。死地は入るのも君の爲め。敵の亡ぶる夫まで。進め
 や進め諸共よ玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟でまゝむべ
 し。彈丸雨飛の間よも。一ツあき身をおしまつに。進む我身
 の野嵐に。吹かれて沿る白露の。いかなき最後とぐるとも。
 忠義の爲めは死ぬる身の。死して甲斐ある者なれば。死ぬる
 も更小怨みなし我と思はん人達。一歩も後へ引く勿れ
 敵の亡ぶる夫まで。進めや進め諸共よ玉ちる劔ぬきつれ
 て。死ぬる覺悟で進むべし我今愛よ死ぬるのは。君のため
 なり國の爲拾つべき者。命なり。たとひ屍の朽るとも。忠
 義のため小すてし身の。名は芳しく後の世よ永く傳へて

裂るらん 武士と生れと申斐もなく 義もあき犬と云へる、
 な 卑怯な者とそしられな 敵の亡ぶる夫まで、 進めや進
 め諸共よ 玉ちる劔ぬきつれて 死ぬる覺悟で進むべし

○花月の歌

小室 弘 作

月と花とい昔より 誰が樂まぬ人やある、こがよろこばぬ人
 やあるさうさうながら 月花も 心よつれてうきことゝの 種
 となれるも多からん 足柄山の風をこく 松風よさう 蕭の音
 もこれより遠く 奥州へ いくさといへば身の末の 死ぬか
 生るか 白河の 關をさ雲や隔つらん 勿來の關の春のくれ
 駒をとめて 睡むれば 都の空の花ぐもり 鏡の袖よ散かゝ
 る 櫻の雪の 將軍の 鞍の霜より 尙白し 戦の枕よ夜に 慣れ
 て 秋のあはれも 知らざれど 越山の月のいと 白く 雲間を
 渡る 鷹が音も 故郷の空よかへるがと 思へば 我もあつらゝ
 花の都のあはれはて、 何處が 我身のおきところ、 今宵一
 夜の 宿願も 櫻の露に 袖ぬれて 滅亡愛にきこまりて 平家

の末を悲しけれ 倭人をらの譏より 諷めの言は容れられ
 せ一人ともなき賢臣の 筑紫の浦のひびきまひ 御衣を拜
 して涙なる 心の底は如何ならん 我君今は賊のため遠き島
 ぢよ行玉ふ 無念の心やるせなく 十字をしるす櫻の木 我
 が赤心を申さんよ杯か多言を要さべき 月の光や花の香や
 幾万年を経るとても 更よかわりひあきなる小 常なきもの
 の世の治乱 月を見て酔ひ花を見て 睡れる春の手枕の 只
 一場の夢の間よろうつる興廢存亡の世のなり行ぐ無常され
 若しも世運の拙なくて 上よの君を煩ひし 下はの民よ苦勞
 させ 國の亂るゝその時ハ 月の光はうらややくも 花の色香
 ひよほふともなきたのしみのあるべきぞ されば世間の諸
 ひとよ 今よりまごゝろ引起し 國の光を東海の 月よりも
 尙輝かし 國のほまれをみよしのゝ 花よりも尙芳はしく
 すること今のつとめなり 誓て斯もあせし後 樂しき月見を
 して見よや 樂しき花見をきて見たや

○ウツセー

山仙士

あたらばあたらばらあたらば 再び會へぬ暇をみ 榮譽よ長く
 別るべし人の習は皆都て 利運の端の芽出さると 八重よ花
 咲き花盛り 位よ位重りて 榮耀榮華を極むれば 愚な胸よ
 思ふ様 運命強く望みかない 天にも登る龍なりと 悦びい
 さむをろかさよ 冬や深く置く霜の 情け用捨も荒野原
 根までを枯す霜枯よ 運極はまりて身の墮落 見るもあはれ
 な有様は 我が今日の身の上ぞ 永の年月心なく 名譽の海
 よ浮べるハ 板子を頼みうかくと 遊ぶ子童よ異らず 丈
 の立たざる淵よ入り 飽まで強き我が意地も 堪へおふせを
 張り裂けて 勞れへてたる精神よ 忠を盡して年寄れる 其
 の甲斐もあく今のハや 身の零落よ涙川 水屑とこそ成る
 べけれ 浮世の虚飾や譽れ程 思むべきものハあらきかし

今に至りて我か胸に初めて悟る所あり廣き世界の其内で王者の機嫌取り取りよ此世を渡る男ほど憐むべきのなきぞかし願ふ所ハ其笑顔恐るゝ所ハ其不興彼を是どの氣がねして愛さ恐怖さの敷々の單なるより尙ほ多し女子の機嫌取るよ増す遠く墜落する時ハ天より落るルシフアあり再び浮ふ瀬ハあらず

評曰字々悲壯巧摸寫寵臣末路之眞境身無才藝徒恃君寵以弄威福者足以爲誡矣

○鎌倉の大佛よ詣でゝ感あり 尙今居士

今を去ること數ふれを六百年のそのむかし建長のころハ鎌倉よいなだの稲多野局のたてられし總持堂の大佛ハ御身の丈けも五丈よて相好いと圓満し見者無厭の尊容ハ何れの地よも比類なしさるに明應四年とや由井のつなみの難

よより大股破壞の其後ハ紫磨金仙も雨よぬれ風よ暴ざれたまふこと殆ど愛ふ四百年このこれ人よ聞くところ余も此頃鎌倉の古跡たづねてちちと杖をひきつゝ大佛よ詣でゝ心おちつけてしかと尊顔見あぐればハちすの花もあよびなき淨き如來の御心ハ外よあらはれ何となく涅槃てふ語の思はれて凡夫不覺の余とてもしはしの間胸の雲はれて無明の夢ハ醒め眞如の月の圓かなる影を見とるよあらねども見たるが如き心地せり夫れ物事のなりたらは願よとゝのふことぞなきむかし羅馬の帝國ハシーガルひとり智を震ひ起りしものよあらずかし徳川氏の繁昌ハ家康ひとり徳ありて成りしものよな思ひぞよ時勢人情やうやくよはこびて此よ至りてき鎌倉山の大佛も浮屠氏の教わたり來て千百年余を過ぎし後ハ人の信仰厚くなり鑄物の術も具はりて初めてなりしものよあらん稲多野局の時代には此大佛よ打向ひ精神こめて手を合せ

天下泰平安穩とわが後生とを憐れども今の明治の聖代も
生れし人の然らせず佛の面をうち眺めむかゝることを思
ひやりそのぬもの師の巧みなるわがを譽むるの外はなし
かはれば變る時勢かき秋の空も劣るまじし昔の人の是と
なせし事も今では非と云なる今日のまことば明日のうそ
あすの教へあまつての非理邪道とやなるあらん天地萬物
一定の規律よりて進化をせし學者のいへど是を之れ一
かど心よ認めたる人は果してあかるらん嗚呼盛なる大佛
よ六百年もたつた川からくれないのもみじ葉と流るゝ水
を年々よ人の譽ることならず尊体こゝに在ます間は如
何よ時勢のうはるとも年々人の尋ね來て歎賞せざることを
まけん

新体詩歌集第二集

竹内 節 編輯

矢田部良吉

新体詩歌第二集

勸學の詩

昔し唐土の宋文公 よし博學の大人ながら
わが學問をきゝめんと 少年易老の詩を作り
一生涯の春の夜の 夢の如しと嘆きけり

國の東西世の古今 人の高卑を問はずして
學の道よ就くものは いかよ才能ありとて
同じ多少の感慨を 起さぬとあるべきや
春の初花 秋の月 夏のみどり 葉冬の雪
都て此世の物事よ 心をとむる時あらば
わが學藝を省りみて 過る月日を思ふべし
池のみぎへの春草の みじかき夢を覺ぬまよ

軒端よ茂るきりの葉の
此年も半は過ぬるを
年の月日と長けれと
ひとよの如く思へれて
螢や雪の光りよて
昔の人の學問の
なほ賢人の嘆きあり
枝よ小枝よ末葉まで
さへ云ふものゝ諺よ
海の初めとひとしづく
心をこめていつまでも
たとひ多くふ渡らぬも
身の爲となる多からん

吹く秋風よさそはれて
文讀む人はしらきやの
難波入江の村あし
我身の上のはづかしさ
文は讀めども業ならず
唯一すぢの道なれど
今の學術多端よて
いかで凡夫の能きべき
山のつじめの一塊土
いかふ急げど詮なし
怠らぬこそよかりけれ
唯一藝を修めなば
蜘蛛に藝あり網をばり

蜂よ能あり蜜つくる

何とて蟲よ及むざる

勉め勉めよよゆみなく
難き事とて厭ふなよ
教の山にしをりあり

進め進めよよとみなく
學の海よ舟路あり
丈夫何かの怯るべき

春夏秋冬の詩

矢田部良吉

此詩の句尾の二字を以て二句づゝ韻を踏みたるものなり
例へばよろこはし〇暖かしの如し

春の物事よろこばし
庭の櫻や桃ののち
野邊の雲雀はいと高く

吹く風とても暖かし
よに美しく見ゆるか
雲非遙かよ舞ひて鳴く

夏の木草の葉も茂り
夕暮かけて飛ぶ蟲の
人の我家を立出て

百日紅も咲きよけり
葉まり來る軒のき
猶涼むらんさよふけて

秋ハ尾花にをみなへし 桔梗の花も開くべし
晴れて雲なき青空に 照らす月形明かに
されど何處も同じこと 寂しく見ゆる家の外

冬ハ雪霜いと深く 冷ゆる手足を暖く
なさん爲とて爐火よ 近く圍居をする時よ
風ハ吹入る戸のあひい 外の方見れを銀世界

○カムペル氏英國海軍の詩 矢田部長吉

イギリス國の海岸を 固く守れる水兵よ
一千年のそのあひだ 汝が建つる大旗ハ
戦争のみか嵐しをも 支へ得たれば此後も
敵を受く共たゆみなく 勇氣の限りひるがへせ
軍烈しくあらむあれ 嵐も強く吹くば吹け
立ちくる海の浪間より 汝が祖先あらはれて
汝を扶けたまふべま 蓋し祖先の軍艦の

其甲板ハてがらの塙 大海原ハ其墓場
大チルソンやブレイキの 死よし處ハ人一のぶ
軍烈しくあらむあれ 嵐も強く吹かばふけ
四方海なるブリョエヤ どりでも城も用ハなし
山どたちくる波とても 千尋のそとも淵とても
慣れて我家よ異ならず いかづちなせる大砲を
船より放ち轟かし 波をわけつゝ進み行く
軍烈まゝあらばあれ 嵐も強く吹かば吹け

國の光とさてし旗 益光りうゝやきて
危難も都て解け去りて 太平の日よもぞるらん
其時汝つゝのものゝ いさほし懲めて諸人が
歌よ唱ひて悦ひて 安榮限りなかるらん
烈しき軍すみし時 強き嵐しのやみし時

○チャールズ・フレマン氏春の詩

春の景色のどけさを
冬への物事さびしきも
とけて樂み限りなし
人をあやまきとぶなき

いかで好まぬ人あらん
春の心のをのづから
雪もどれもふる雨も
のどけき春の來る時の

北風強く吹く冬の
雨もこぼりていと寒く
爐火近く圍居して
さびと嵐も雪も歌む

野邊にの深雪木の氷柱
障子ふすまを延廻はし
ぬぐらの鳥ふとならき
のどけき春の來る時の

曇りがちな春の空
去と春にもなりぬれば
光りのどけき天を見る
跡も残らず消へうせる

日影もろそく晝くらし
喜をくも雲はれて
いぶせく降りし雪霜の
のどけき春の來る時の

○西詩和譯

息の出入とかだの血

坪井正五郎
しかのみあらき宜心地

清きたましひくれ命
還よ變る針の位置
あきへ則ち無能無智
よき働きを爲せる後

時計のめぐり早くたち
歳へきぐとも業とさち
多く考へ氣をこもち
長しと言はんこの命ち

○刺客を詠める詩

大學のなかせたちのものせられたる新體詩抄の體よ
倣ふ 八門 奇者

天を仰げばいと廣し地見わたすも亦廣しその中に住む人
よしてなとか心の狭かりし狭き心の一節よ此の人あらば
世の爲よゆるしき事や起らんと思ひわびけん朝夕にや
がて病ふかこつけて勉めしわざも打棄て 時の花散る春風
のきこやの里に歸り來て それと言いぬご父母よ 是が此
の世のお別よ厚き恵も報い得き先だつ罪の免してよろか

四十三

らはらうら友がきよ 告げんとすれど告げがてよ おもひ煩
 ひかき残き 心の盡さず執る筆に 今日春雨のふる里も
 やたち出る旅ごころも 頃も經ずして稻葉山 ふもとに着きぬ
 嬉しくも 識る人としていながら川 おもふかたきよあふ瀬を
 を尋ね問ふべきよしもがな とく押まりしこの白刃 憎さ
 も憎しかのかたき 非ぬ望みを胸におき 下なる民をそゝの
 うし 上の掟を言ひあばき 上を崇むる人をしも 諛ふもの
 と諺れども下にいつらひ民よこび ねぢけいぞたる彼等ど
 も 佐賀よ起りし箭さげびも 長門に降りし火の雨も 薩摩
 の瀬戸に幾千々の 人を沈めし浪風も うたてくはあれど君
 がため 高麗もろこしも討鎮め 國のみいつを振はんと 思
 ふ餘りの其の結句 憎むべしとも覺ゆれど 思ひかへせば可
 惜ひと 是よ引きかへ彼のともへ 世の正道を乱さんと 彼
 の蠢げき佛蘭西の 血の波たちし禍津世の 首斬り臺に國王
 をひきすへたりし當時の いと淺ましくふるまへる あと

五十三

よ心やとまりぬる 口をひらけは鮮血もて 世を洗へんと叫
 ふなる かゝる勢ひつものりなり 危からまし大君の いで大
 君の御爲よ斬り懸してん彼の人へ さはざりながら彼の人
 の誠よかくも思へるか 附き従へるにせもの、 妄よしかの
 いふなるか とにもかくにも彼の人への 心の底を知らんとの
 願ひかなひてまのあたり 惹んぜつ聞しその時の 心の中へ
 いかなりし 今いすこしも宥されじ隠し持ちたるし首 袖の
 裏にて抜き放し 待つとのさらば彼の人へ 神あらぬ身の思
 へぬへ 眞高らかよしつしづと歸る 跡より飛びつけを何故
 ありてかくすると 言へせも果てき何故と問ふへ愚よ汝と
 そ 今將來の國賊と 閃く又ほとはしる血しほも赤き心なる
 此のますらをの真心の 貫かざるを怨みある よしやうらみ
 は遺るとも なほき其の名へ世の人も ふみよしるゝて音高
 く 語りつぎなん千世までも されど敵を見ひがめし 其の
 紳士の世にためし すぐききまでよあつかりき 君よ忠なる

こゝろざー國よつくせるこゝろざま

○外交の歌

屈山居士作

西小英吉利北 魯西亞汕斷な爲せを國の人外表に結ぶ條約も心の底の測かられき 萬國公法ありとても いざ事あらば腕力の強弱肉を争ふの覺悟の前となるぞ 嗚呼同胞の兄弟よ御國よ生れ一甲斐あらば 盡せや勵め諸共ふまこゝろ込てつくきべし

○倭基朝臣東下

落花の雪に踏み迷ふ 片野の春の櫻狩り 楓の錦を着て歸る 嵐の山の秋の暮 一夜をあらま程たよも 旅寝となればものうきに 恩愛のちきり淺うらず 我が故里の妻子をば 行衛も知らき思ひかき 歳久まくも住みなれし 九重の帝都をば 今を限りと顧みて 思はぬ旅よ出で給ふ 心のうちがあはれ ありうきをを留めぬ逢坂の 關の清水よ袖ぬれて 末の山路を打ち出の濱の沖を遙かよ見渡せを 汐ならぬ海ふてがれ

ゆく身をうきふぬのうき就み 駒を撫るとふみならそ 瀬田の長橋打ち渡り 行きかふ人よ近江路や世の畔の野よ啼く 鶴も子を思ふかど哀れなる 時雨もいとく森山の木の下露よ袖ぬれて 風よ露ちる篠原や篠わけける道をぎ行けば 鏡の山もありとても 涙よくれて見分たず 物の思の夜の間よも 老蘇の森の下草に 駒をとめてかへり見る 故里くもや隔つらん 番場鮫ヶ江柏原不破の關屋のあればはてゝ 猶漏るものは簷の雨いつか我身の尾張ある 熱田の八劍ふしかかみ 潮干よ今や鳴海瀾 傾く月よ道見にて 明ぬ暮れぬと行く道の入相なれば今はとて 池田の宿よ着き給ふ 元暦元年の頃とかや 重衡中將東夷の爲め捕はれて 此の宿よ着き給ひしよ

東路の羽生の小屋のいふせきに

古里いかに戀しかるらん

と長者の娘が讀みたりしその古のあはれまで 思ひ残さん

涙をりける 旅館の燈幽よして 鶏鳴曉を催せむ四馬風よ嘶
 いて 天龍川をうち渡り さよの中山越に行けば 白雲道を
 うづみ来て そことも知らぬ夕暮の 家郷の天を望みても
 昔し西行法師が命なりけりと 詠じつゝ 再ひ戀し跡までも
 うらやましくぞ思われける 隙行く駒の足早み 日既よ亭午
 よ近ければ 登餉する程とて 輿を庭前よあろし 長柄を叩
 て警護の武士を近づけ 宿の名を問ひ給ふに 菊川と申すな
 りと答へければ 承久合戦のとき 院前よ書きたりし答よ依
 り 光親關東よ召し下されしよ 是の宿にて誅せられしとき
 昔南陽縣菊水酌下流延齡
 今東海道菊川宿西岸終命
 とかきたりし 遠き昔の筆の跡 今の我身の上に成り あは
 れやいと、勝りけん 一首の歌を詠して 宿の柱よかけられ
 ける
 いやーへも斯るためしを菊川の

同しながれよ身をや沈めん

○故里の益子が許より蘭よ長歌をへておこ

されければ

藤田 東湖

敷ふれむはや一とせの旅桃 おどろかれよし秋風もことし
 はさまが聞きなれて うきとも知らせ白雲の 棚引く間より
 もる月の かげも隅田の夕へをば 獨りながむる蓬生よふ
 る里人のおとせれて いとめづらしき 藤袴 明石も須磨もあ
 れ庭よ 時し忘れて咲きよほふ たれが色香を言の葉よそ
 へてはるくかこせにき 深きなさを杯よ うけて酌みつ
 ぐ 敷島の やまどのみかは海原の よそある國のことまでも
 思ひ渡せば世の中の つらきためしも人の身の ふさひぬ事
 もありそうみ 濱の真砂のかきよりも なほさはなれば君が
 爲め うづもる身へ なよの瀬 あしのふしきへ中くよ
 よしともいはん秋の夜の 旅のあはれもふる里の 春よ逢ひ
 ぬる心地とやいはん

○小督の歌

牡鹿なく此の山里とさしげん嵯峨のあたりの秋の頃ち
 くさの花もさましくに山の恨みも深きよの月よまじり出
 招くは尾花萩よの露の玉虫や そよぐをさ出くつり出
 啼音よつれて中國が寮の御馬 たまはりてとのめすがた
 の藤袴たづねる人の おもかげふたつ薄霧の 女郎花それ
 かあらぬかまぼろしの 蓬が鳥根たづねわび 駒引とむる
 篠のくま息ふかげの 松風よ かよふつまふとつまこひの
 ねよよる鹿よあらぬども昔を覺ゆるふえ竹や 合すえら
 べのまがひなきことえをさるべに よる嵯峨のの奥の かた
 をり戸 想天戀の唱歌の 比翼の翅の 雲井を越へ 盤渉調の
 しらべの松の連理の枝よかよふ小督の局世を忍ぶすみ
 ろも明日は大原よ かへん姿のなごりとして よろよ手習す
 つまごとのいらつこす思ひせきかねて 涙よ袖をかこしは

や人目も如何あやめがた糸の色音をさるべよてさし入
 月の雲井より御使にまへりしと かしてき君が 詔り野
 べのをちかためけさくつ露の玉章をこよさるしまごの
 はしの縁の綱又ひき結ぶ御還りごとそつて給へるらつこ
 衣きぬく送るほども無く迎への車たてまつり 昔しよ
 かへる百敷や 千代を契りの松のことのは

○東の花

吉野よく見し人は不知花の東まの 隅田川 よよえぬ春の
 ひどりぞや みやことどりよ 事問ひし昔よのにぞ渡り守春
 の暇無くみされどほ指して堤を 行き通ふ人の袂の あけ
 みどり柳の絲よ引かれ來て 長き日暮らし花の香を袖に
 しめてゆくみかはえ遊び戯れつたをやめの 歌ふ一トふし
 ゆめならば残らぬ袖のうつり香を如何よ定めむ 咲きよほ
 ふ花の手枕ら夢ならぞ かはすもあだの 花の影 流石嬉
 一き ゆうりよも 紫とさかふる 武藏野の 廣し恵みや 仰

ぐらん 尙行末も 千代八千代 長き堤の花櫻ら 染へ染へん
御代の春

○長恨歌

今の昔し 唐しよ 色をおもんじ玉ひける帝 おのせませし
とき 楊家の娘めかしてくも 君に召れて 朝さくれの御寵
みあさからき 常よかたはらよ侍りぬ 宮の内のをや女三
千の寵愛も わが身ひとつの 春の花ちりていら香も 亡き
魂のありかを尋ね みるれどほ さとしてはるく行く舟よ
法士の涙のうきぬさる 常世の國よ 來て見れを 樓閣玲瓏
として五雲おこりうちよなまめく 女の童のことよすぐれ
て眞玉の きがこはらづれ 李花一枝 あめを帯びくる其の
氣のひ 見るよりそれと ことのはも 涙こぼれて欄干をひ
たすもいかよなれ染し 龜山の昔し 思ひやる あらあつか
しの都へのづうしながら在し夜の 其のもつことも消へん
つる 露のちぢりの うさうらし 二ふこみよあらひとかた

よ 御思召まかや 深き江よ 春の水の 薄きひいやよ 思ひ
逢ふよの うちをけて 寝みだれ髪を 其のまよととりつく
ろのぬ女きを かあむがらんせからまばの 色に此の身を染
め糸の 結びめかたきかこらひも 縁つきぬればいたづら
よまたこの島よかへりきて尙なつかしき 古へを 思ひい
づれをあられある 鶯破霓裳羽衣の曲 まれよぞかへき乙女
子に まれよぞかへき乙女子に 袖うちふりし心しりきや
さるに、君も よの此の世あひみんことも よもぎが鳥つ
さりうきよあれども 戀しやむかし 戀しや昔の物がたり
つゝさき月日も うつりまひの しるしのかんさーこまは
りて 都よかへる 家づとい ふみふもまさる ふみ月の 七
日のよの 私語ひよくれたりも いまのはや かれくあ
りまらきちぢり 天のどこしなへなるも つちの久しくふ
りぬるも かつるをきあり 此の恨み 綿々浪々としてたえ
まなく 今よのこせし筆の ちぢ

○櫻がり

長閑なる頃もあつらふおしなべて見わたす山もうちけ
 むり柳のいとこのあつらひたり春のよこぎりあやましくも都
 よしらぬしらくものたてゑるやしるべ櫻狩り人のあゝろ
 もあてかるゝそらを見せてゝこまぢけりまつらむもの
 を行鴈のかほるゝ一葉の空よきへ聲のあわれよ聞ゆなり
 行衛したひてこちとまりなこりのしばしわきれぬを初花
 ぐるまめぐるひのながつらぬて見せもあらず見もせ
 ぬ人や花の友しるもしらぬも花の影あひやをりしてす
 がのねの長き春日もいらつらよ日影をこゝて花ごころも
 なれしたもとの香よそみて野邊も山へも花ゆへにいた
 らぬくまのなけれとも山のやまのいらぬをとめて落る
 千すぢもゝそぢ佐保姫の手びきの糸のたききくの手折
 てゆかんいりあひの鐘よりあかき春霞こちなかくして
 風ハ吹とも

○芙蓉を詠める歌

まゑろなるたか根もはるのさくら花さくやひめとのか
 みよの古し神代も花のいろさかり花のそがたのいとしら
 しまんずいとしらしとともかここき人のよよふしもす
 くなる竹取の翁のむきめつよいむすめみぢきたてなるか
 つらのまゆよかほはてりそよ秋のよの月よかこちてふる
 ちとを戀ひしがるやつしおふやつやつとやつとを指折見
 れと二八十六でふみこまづさを鴈が持てくる雲井より
 ちらと見せたつ冬たつ天に降り来る雪のはばじまんこれ
 見よがしよ三保の松羽衣もといふ迷言かけた天津乙女の
 うはきかあだかをこひぞりか此の年月をしづがふせや
 に假り枕ら絲も探りひはたをりくよ霓裳羽衣の曲を
 あし東まゑそびの駿河舞雨ふるるほふ花の袖かへまゝ
 もとよ充滿の寶らを普ねく世よふらせ施こしたまふい
 つくこみ盡ぬそのなは蓬萊の山又茲小富士のねの扇の

裾野 末々廣き御國の要めと祝しけり

○西行の歌

われもむかしひますらをの 眞弓つを弓としをへて 引き
たぐへたる朝と夕の 命ちまりけり旅衣こけの衣に身を
そきかへて心のちりの 袖はらふやばなせかいよいとを
このいとしかのいは 昔まのことよのよまの山ころのこ
をりの 道かへて まだ観ぬ花の 色々をとづねくしてう
た枕ふでのまきみの 墨染櫻うつろふ春の花のかほやせ
るすがたよ かききななりを 水の鏡よかけとめてまをし
立よる 柳かび

新体詩歌第二集終

新体詩歌第三集序

和歌裨於世教。漢詩亦益於德化也。明矣。然而非入其道熟之。則吟之詠之其感情猶與雜僧誦經一般而已。夫俚歌俗謠。童幼

婦女。好而誦之。者所謂雖鄭聲導情欲之所致亦是解之易也矣。爰者學友竹内氏。有新体詩歌第一第二集之編。今又以所輯第三集。示余。愛而誦之。其語不高。其調不卑。荷。適儉々普通之文字者。悉得誦之解其意也。而句々慷慨盡忠。章々友愛貞節。使其感動人心也深矣。余謂。以此詩歌易彼俚歌俗謠。今人々誦之。則其志氣自昌。其情性自和。而遂移風易俗。亦非難也。因聊記之以其感情之一端云爾。

明治十六年癸未三月上浣

雨軒 坂部 識

新体詩歌第三集

坂部 廣貫 校閱
竹内 節 編纂

左の詩ハ一千八百五十四年英佛の兩國土耳其斯を援けて魯西亞と兵端を開き遂よ高名あるクライミヤの戦争とあり

此間數多の合戦此處彼處に在りたる中最有名なるもの
同年六月廿五日バラクラバの戦争よて英國の輕騎兵六百
騎が目よ餘る敵の大軍中へ乗り込み古今無双の手柄を顯
へたれども惜い哉衆寡素より敵し難く其大概に討死し
或は擒ふせられ無難に歸陣したる者甚僅よて有きと當時
英國よ有名なる詩人テニソン氏が其進撃の有様を吟詠
たる者よして何國人よ限らず苟も英語を解するもの此詩
を暗誦せざるはなしといふ

山仙士

テニソン輕騎隊進撃の詩

其一

一里半あり一里半 並ひて進む一里半
死地に乗り入る六百騎 將は掛れの令下き
士卒たる身の身を以て 譯を糾すの分ならず
答をなきも分ならず 此れ命これふ従ひて

死ぬるの外に有ざらん

死地よ乗り入る六百騎

其二

右を望めば大筒を 前も左りも又筒を
共よ打出き砲聲の 天よ轟くいかつちか
響の如く凄まじや 彈丸雨飛の間よも
猛り立てて進むある 死地よこそ入れ鱈の口
勇んで乗り入る六百騎

其三

九十四
抜けの玉ちる刃をば 皆諸其に振あげて
きら／＼と輝けり 敵陣近く乗り掛けて
大砲方をなで切りす 最と目冷しき働きを
煙の中よ飛込みて 烈しく陣を破るなり
太刀の早業見事なり 敵の軍勢たち／＼と
遂にさそふる事ならず 群／＼ばつとむら崩れ
馬の頭を立直す 以前よ進みし六百騎

残るのいと、僅かなり

其四

右を望めの大筒ぞ
共よ打出き砲聲の
彈丸雨飛の其中よ
死地より出て乗り歸す
歸るの元の一里半
残るのいと、僅かなり

左りも後も又筒ぞ
天よ轟くいかづちぞ
縦横むえん切り靡く
鱗の口より脱れ出て
六百人の其中ぞ

其五

あゝ勇ましき武士の
手柄の永く傳へなん
とる年あまゝ重なりて
頭に霜を戴きて
六百人の豪傑が
其古事を語りあひ

世よ香しき其譽
今のをさきの生立ちて
腰の梓の弓となり
孫彦やしやご多き時
敵の陣へと乗り入れる
末代までも名は朽ちじ

○朝顔の花よ寄せて學童を奨勵せ

小川健次郎

庭のかきねの朝かほよ
咲とも盡ぬ其花の
同玄天地の恵みよて
深き心を白露の
人こそ花よ劣るらん
負けず起出て機嫌能
我身の無事を神よ謝し
様や襖の拭きいらひ
やかて汝の寶も花も

朝な／＼あこたらき
色といひ又形までも
我等の目をば慰さむる
干をも知らで寐きたる、
學ひの兒よ此花よ
鏡打洗ひ父母と
庭の面のほき掃除
怠らぬやうつとめよや
此朝顔よもまさるべし

庭のかきね朝かほの
咲とる花の其色に
異なる原因や其外よ

朝な／＼咲由理や
白といひ又赤青と
我等の目をば慰さむる

心理の法や白鷺の
人こそ人の甲斐をけれ
疑ふならば躊躇せを
精神論や物理學
化醇の律をあきらめて
幾春秋の年月を
今を苔の汝の身
勤めて徒よ過ぎるなよ
苔よ似たる學の兒

○題秋 (西詩和譯)

早やさしよけし秋の影
そよ吹く風よ翻かへり
苔のあからみいよ深き
賤の小家の静けさへ
浮世の塵をよそよ見る

結ぶ作用をいらて過ぐ
學ひの兒よ此問を
普通の學を疾く課へて
夫から夫と研究し
學士哲士と呼ばれたら
樂しき中に送る可し
露の世る間も怠らず
花よよく似た苔の兒

望月秋太郎

庭の木の葉の散くくと
草屋を圍む垣の面の
千ひらの金に勝るなり
此うくれ家に聞ゆるの

時つゝ遠き鐘の聲
夏の緑りも消へて、
谷の水際よ咲き残る
色いとさめて哀れなり
秋の景色となるふつれ
谷間を越て諸共よ
黄昏時よなるまでも
今われ爰よ唯ひとり
移り傾く日の影に
猶ほ幻しよ見ゆるあり
移りきへ行く夕日影
西の山端のくれあひの
黄昏暗くなるまでも

○ロンヅァエロー氏人生の詩

とも靈魂の眠るのい
死ぬと云ふ者ぞかし

山仙士

山々深し秋の色
小草の花の紫も
時へ來よけれ去年迄の
登り遊ひしあの山よ
待てとも更に聲へせて
健く幼なき面さしの
獨り行む戸の外よ
色もいつしか消うせて

四十五

人の一生夢ありと
眠らよや夢の見ぬ者ぞ
夢と思へど左にあらず
人の一生夢ならず
人の終へ墓なくも
土より來り又土よ
そりや靈魂の事ならず
此世よ在りて樂むも
世に有趣意よ有ざらん
日毎くよ怠らき
功を立ねそならぬぞよ
光陰實よ箭の如く
心へ如何よ猛くとも
送葬太鼓打つ胸へ
最とも哀れよ響くらん

哀れなふして歌ふなよ
此世の事の何事も

最と慥かなる事ずかし
墓に埋まるものあらず
歸ると云ふの肉体を

又苦しむも困と人の
生るの役よ立つ爲ず
今日へ今日丈け一日の

藝道最とも易からせ
墓なく進む葬禮の
音止めされたる太鼓の音

五十五

此世の中へ戦争を
人よ生れた甲斐もなき
あゆむ羊や牛たるな
功名手柄なすべきぞ
如何よ樂しく思ふとも
如何よ嬉しく有つる共
働くべきの現在を
胸の心と天の神
豪傑輩の一生を
生きて甲斐なき者成老
稀なる聖得るならば
永く傳へて残るらん
其香しき名を聞かば
艱難辛苦の浪風よ
助け船とへあらぬ身を

其戦争の中よ居て
人に使われ追はれつる
人よ劣らき憤發し

未來へあてやす可らき
過去へ昔し小過し事
其働を見る者の

熟ら思ひめぐらせば
人よ勝れし手柄して
名は香しく後の世よ

社會の海に乗り出して
吹廻りされて破船して
氣を取り直し憤發し

六十五

功徳遠くする者あらん
されど人々怠たるな
運命如何よつたなきも
撓まず止まき自若と一
勤め働くとをせよ

暫時も猶豫するあかれ
心を落すとなかれ
功名手柄なしつゝも

○ロンヅフェロー氏兒童の詩

尙今居士

來れわらへば傍らよ
我等が多年苦みて
忽ち解けて露ほどの
汝が遊ひこゝむるを
窓打あけて日よ向ひ
清く流るる川水よ
流るる水も鳥の音も

汝が遊ふさま見れ
なほとけさり疑ひ
曇りも胸よ止まらず
見るの恰も東なる
さへづる鳥の聲聞て
臨むが如き心地せり
照らすあさひも汝等の

七十五

心の如くゆたかなり
かあしき秋も過去りて
童へ無くば世の中の
童へ無くを我く
前を望むもうむたまの
知らずや茂る森の木
清き空氣や日の光
善き汁液を造り成し
知れよ閑けき氣候を
幹よあらで軟かき
森を此世よたとふれば
來れ童へべらこらよ
花よ戯れ啼く鳥も

されど我等の心中の
寒き雪霜ふりよけり
如何よ苦まきとならん
後ふり向も愛さへかり
闇の夜中よ異ならず
いと美へしき緑り葉よ
其作用を施して
幹と枝とを養ふを
うけて早くも感する
緑の葉にてありぬるを
葉へ童へべら比ふべし
のぞけき天を吹く風も
汝が清きこゝろよ

如何なる事を告ぐるやを
思慮を巡らし智を竭え
我等が書ける文とても
汝が面の樂一さよ
人の賞そる詩や歌の
完全無腐の汝等よ
汝へ生ける詩歌あり

○社會學の原理よ題を

我耳近くさよやけよ
我等が成せる業とても
汝が様のかへゆさよ
比ふるとのあるべきや
世よ數多くあるあれど
及ふへき者あらせかし
他の皆死よし言葉のみ

山仙士

宇宙の事へ彼是の
規律の無きへ有ぬかし
微かよ見ゆる星とても
云へる力のある故ぞ
又定まれる法ありて
且つ天体の歴廻れる

別を論せき諸共よ
天よ懸ける日月や
動くへ共よ引力と
其引力の働の
獲りに引ける者ならず
行道とても同じと

必ず定まりあるものぞ
地震の如く亂暴よ
一よ定まれる法のあり
地をへふ虫や四足や
其組織より動作まで
又万物へ皆共よ
あらざる物の無さかし
別を論せず諸共よ
遺傳の法で子に傳へ
適せぬものへ衰へて
桔梗かるかや女郎花
牡丹よ緑の唐獅や
木の間に囀る鶯や
雲井に名のる杜鵑や
友を慕ひて奥山よ

又雨風や雷や
外面へ見ゆる者とても
野山よ生ふる草木や
空翔けりゆく鳥類も
都て規律のあるものぞ
深き由來と變遷の
鳥けたものや草木の
親よ備へる性質の
適するものへ榮へゆき
適の世界よ在るものへ
梅や櫻や萩牡丹
菜の葉に止まる蝶々や
門邊よあさる知更鳥や
同を友をを呼子鳥
紅葉ふみわけ鳴く鹿や

譯も分らで貝の音よ
羊よ近き猿のまた
靈とも云へる人とても
元を質せば一様に
精み重なれる結果すと
積極めたるは是ぞこれ
優きも劣らぬ脳力の
是よ劣らぬスベンセル
化醇の法て進むのハ
動物而已ふあらきして
活物死物夫而已か
區別ハ更よなかりしを
減するも尙ほ餘りあり
思想智識の發達も
社會の事も皆都て

追ハれてあゆむ牛羊
愚なとよ萬物の
今の體も腦力も
一代増よ少一づ
今古無双の濶眼で
アリストートル、ニウトンよ
ブルウチン氏の發明ぞ
同じ道理を擴張し
まのあたりみる草木や
凡そ有としあるものハ
有形無形夫れくの
眞理極めし其知識
されば心の働も
言語宗旨の改良も
同交理合のものなれを

既よものせる哲學の
生物學の原理やら
土壘となして今更に
書にもものさるゝ最中ぞ
そも社會とハ何ものぞ
其結構よ作用に
種族と親と其子等の
男女の中の交際や
取扱の異同やら
違ひの起る原因や
其變遷の原因や
智識美術や道徳の
遷り變りて化醇さる
論述ありて三卷の
最も目出度美譽よこそ

原理の論ず之よ次ぐ
心理の學の原理をば
社會の學の原理をば
此書よ載て説かるゝハ
其發達ハ如何なるぞ
社會の種類如何なるや
利害の異同如何あるや
女子よ子供の有様や
種々な政府の違ひやら
僧侶社會のある故や
格式工業國言葉
時と場所との異同にて
其有様を詳細よ
長き文よぞせらるべき
既に出てたる一卷を

讀たる者ハ纏めりて
實ニ珍らしき良書なり
何うら何とせむをやく
走り書やら空しやべり
天下の事ハ一と飲みと
新聞記者や演説家
人をあやめる罪とがの
月日の事や星の事
夫等の事はさて置きて
疊一枚させむとて
長の年月年季入れ
出来る事ハ有ざるよ
年季も入らず學問も
新聞記者や役人と
箇やうも者多ければ

此書を褒めぬ者ヲなき
社會の事に手を出して
責任重き役人や
舌も廻らぬくせにして
法螺吹き立て利口ぶる
此書を讀て思慮なきは
少しは減りも爲ならん
動植物や金屬や
凡そ天下の事業ハ
足袋を一足縫へばとて
寝る眼も寐せよ習ハぬは
獨り社會の事計り
するよ及ばぬ譯なれば
成は最と最と易けれと
忽ち國よ社會黨

倚は恐ろき虛無黨の
探めよ探めたる其上句
秩序も建たぬ自由なく
再び浪風静まりて
百年足らず掛らんは
有様見ても知られたる
妄よ手出しまる勿れ
廣き世界の其中よ
盲目同士の戦に
規ひきまらぬ棒打の
今の世界ハ旋風
烈しき中へついで一寸
足も据へらず瞑眩さ
廻く廻きて
上句のついでハ空中へ

起るハ鏡よ見る如し
此蜂取らぬの丸潰れ
泥海よこそなるべけれ
太平會と成る迄ハ
革命以後の佛蘭西の
そこに心が付きたらば
妄よしやべると勿れ
恐るべきもの多けれと
越したる者ハ有ぬか
仲間入りこそ危ふけれ
烈しく旋る時なるぞ
絡き込まれたら運の盡
頭ハいどぐら付きて
透間も非き廻ハされて
絡き上られて落されて

初て悟る 其時ハ 早遅 時 の 唐椒
 後悔先きよ立ぬあり 颶風烈しく吹く時ハ
 其吹く中へ過ちて 船を入れぬが楫取の
 上手とこそハ云べけれ 政府の楫を取る者や
 輿論を誘ふ人たちは 社會學をハ勉強し
 能く慎みて輕卒よ 闘ふぬやう願はしや

○遊墨水歌

飯田武郷

隅田川堤の櫻咲みだれ みたる、盛咲よほひ 匂ふ遠近梢
 よハ雲をさひかし木蔭よハ雪こそともれ見渡の筑波の山の
 春霞かすめる空よはのくくと半みへその水上の舟の帆影ハ
 はなれて洲を早くはなれて目の前に近付よけりとりよるふ
 氣色をみれをよる波の 音ものどけく行水の かげも静かよ
 自心をちめておもしらみ 遊ぶ此日の暮をもならぬか
 皆人の心ひらけて隅田川遊ぶ盛りを花もみるらん

○詠和氣公清麻呂歌

久米幹文

八隅し、和期大王の見したまふ御夢のひまようき濁る弓
 削の川波おほけなく 逆のほらひてあふぞみる高坐山の高
 峯をもひとし汚せハ此世ハ海よやならむ人ハ皆魚ニやなる
 と天の下あけりふはしよ廣幡ハ八幡の神の神憑り 我國は
 一も天地の始の時と上下の ことわり正しくあたふれ穢き
 ものハ神透ひ へらひすて、よ打對め拂ひそけよとた、昔
 よのらし給へハ大御言 いたく臣のおほれむ事も思ハを
 沈まむ身をも忘れて畏と歸奏せば 長いのみ夢ハ覺て惱ま
 しきみ心うせめ逆卷水速けれと 立騒く波高けれと 大御稜
 威に争そひかねて末終よくたり落たり其臣の功ハ高く其臣
 の名さへさやけく後世の 鏡よせむと稱め給ひ 治めたまひ
 て神とさへいはひ奉らす事の尊とさ
 君こそハ水附屍と弓削川の逆卷波をた、渡りつれ

新体詩歌第三集終

新体詩歌第四集序

余谷嶮竹内氏ト始メテ湘川ノ澣リニ相逢フ同居スル數月ヲ
 リ一度袂ヲ別ツテヨリ爰ニ三年復ヒ東都愛宕ノ麓ニ邂逅シ
 手ヲ握リ膝ヲ交ヘ相語リ相問フテ數刻ヲリ氏其編ズル處ノ
 詩歌第四集ヲ以テ余ニ示シ且語曰ク凡ソ人喜怒哀樂ノ感情
 慷慨悲憤ノ氣韻苟モ其腦裏ニ充溢スル者ハ或ハ是ヲ詩篇ニ
 漏ラシ或ハ是ヲ歌章ニ詠シ以テ能ク人心ヲ鼓舞シ又能乾坤
 ナ感動セシムル者古今其例少ナシトセズ然レモ今我國ノ風
 俗ヲ見ルニ詩歌ハ殆ント探瓠者流ノ玩物ノ如ク文人墨客ノ
 一遊戯ノ如ク然リ其之ヲ爲ス者モ亦徒ニ月ニ吟シ花ニ詠シ
 殊更ニ奇語ヲ綴リテ雅致ト稱シ人事ヲ離ルヽヲ以テ快樂ト
 ナス又嘆ナラスヤ又遺憾ナラスヤ今此編ノ如キ其語ハ俗其
 詞ハ易故ニ牧童モ以テ誦スヘク機婦モ以テ讀ミ易カルヘキ
 ナリ然リ而又其喜怒哀樂ノ情ヲ詠シ慷慨悲憤ノ氣韻ヲ漏ス
 一ハ彼ノ章々文ヲ成シ句々調ヲナス漢詩和歌ニ讓ラサルナ
 リト余卷ヲ開キ默讀スル數章乃チ鉛筆ヲ紙リ其語ヲ録シ以
 テ贊成ノ意ヲ表ス

明治十六年林鐘下浣

在東都

斗墨柳田識

新体詩歌第四集

竹内 坂部 節 編纂 貫 校閱

我邦ニ於テハ西洋ノ詩歌ヲ翻譯スル人甚々少ナシ蓋シ其
 趣向ノ我詩歌ト同シカラサルカ爲メナルヘシ又適譯ス
 ル人アルモ之ヲ支那流ノ詩ニ摸擬スルカ故ニ初學ノ輩ハ
 解スルヲ能ハス余之ヲ慨スル久シ以爲ク西洋人ハ其學術
 極メテ巧ミニシテ精粗到ラサル所ナシ其詩歌ニ於テモ亦
 之ト均シク能ク景色ヲ描寫シ人情ヲ穿テ讀賞ス可キモノ
 多シ且ツ其句法萬種ニシテ韻ヲ踏ムモノアリ踏マサルモ

ノアリ緩漫ナルモノアリ疾急ナルモノアリ其語勢ノ變化
殆ント捉摸ス可カラズ而シテ其言語ハ皆ナ平常用フル所
ノモノヲ以テシ敢テ他國ノ語ヲ借ラス又千年モ前ニ用ヒ
シ古語ヲ援カス故ニ三尺ノ童子ト雖モ苟クモ其國語ヲ知
ルモノハ詩歌ヲ解スルヲ得ヘシ加之西洋人ハ短キ詩歌ヲ
好マサルニハ非サレトモ亦長篇ヲ尙ヒ尋常ノ日本書ノ如
キ薄キ冊子ヲ以テスレハ一篇ニシテ十餘冊ニモ上ルモノ
少ナシトセス頃口學友某々氏ト相謀リ吾人日常ノ語ヲ用
ヒ少シク取捨シテ誠ニ西詩ヲ譯出セリ余素ヨリ詞藻ニ乏
シト雖モ既ニ譯シタル所數篇ニ至ルヲ以テ今其一ヲ舉ケ
テ江湖諸君ノ高覽ニ便ス幸ニ其詞藻ノ野鄙ナルヲ笑フナ
カレ

尙今居士

○虞禮氏墳上感懷の詩

山々かすみいりあいの 鐘のなりつゝ野の牛の

徐よ歩み歸り行く 耕へす人もうちつかれ
漸やく去りて余ひとり たそがれ時よ残りけり

四方を望めハ夕暮の 景色のいと物寂し
唯この時よ聞ゆるハ 飛ひ來る蟲の羽の音
遠き牧場のねやよつく 羊の鈴の鳴る響

猶其外よ常春藤しけき 塔よ宿れるふくろふの
近よる人をすかし見て 我巢よ寇をなまものと
訴へんや月に鳴く 以と哀れよも聲すなり

かしこよハ楡又こよ あらゝきの木そ生茂る
其下かけふうつたかく 苔むす土の覆ひとる
坑に埋まれこの村の 古人長く打眠る
軒の燕も 鷄も 木魂よ響く角笛も
朝朝けよそなりぬれハ 聲すしくハありつれと

冥土の人の眠を

覺きとこそなかりけれ

死したる人の果敢なきよ
妻のよきへも誰爲めそ
爺の歸里をよろこひて

身を暖むる爐火も
愛るわらへかうたよ
小膝よきかる事もなし

曾てこの世よ居し時の
山も畑も其歟ふ
繁れる森も其斧よ

麥も小麥も其鎌よ
手荒き馬も其鞭よ
任せて君か儘なりき

功名とても浮雲の
この古人の世の益と
能しき妻子の暮しをも

過るか如きものなれ
骨折するも不運をも
笑ふへきに非すかし

富貴門閥のみならず
浮世の榮利多けれと

みめ美しくしき乙女子も
いつか無常の風吹う

草葉の露もかろかなり

黄泉に入るの外うなき

苔に埋れし古人の
餘りまのゆき屋の内よ
樂器の音を聞すとも

墓場の上よ寺を建て
頌歌の聲よ合すある
身の不徳とな思ひそよ

ひつき肖像美を盡し
一度ひ絶え玉の緒を
詔らふ人のほめ言も

人の尊敬多くとも
繼ぎ留むへき術のなし
長き眠の覺たまえ

考へみれの廢れとる
世よ優れたる量ありて
詩文の才も多けれと

此古塚の古人も
國を治むる徳を具し
顯れずして失せける歎

學ひの海の廣けれと
心の性の賢こきも

渡る船路を知らざれ
身の賤しくて貧なれ

世の譽れをい聞ずして

空しく鄙よ終りけり

深き水底求むれハ

輝く珠も有そかし

高き峯をい尋ぬれハ

馨る水草の多けれと

千代の八千代の昔より

人ふ知られて過よけり

實よ此墓に埋もれて

業は劣るもハムデンよ

詩ハ拙くもミルトンよ

國に軍を擧すとも

タロムエルよ比ぶべき

人の屍やあるあらん

議院の議士を服さしめ

人のおごしも外に見る

國の安危を身よ委ね

高き譽望を民よ得る

此等の業はあしなべて

古人何ぞあづからん

惠みは廣く及ハぬと

又常々のふるまいよ

不徳もいと少なしや

人を殺して王となり

民を惱めて利をあみす

夢よも見まじ去るとは

誠をかゝそその言よ

耻るを忍ぶ心の苦

且つ巧みなる詩文もて

富貴よ媚る世の習

是ハ都の弊なれと

未だ此地よ及ばさき

此所よ生れて此所よ死に

都の春を知らざれと

其身ハ淨き蓮の花

思ひは清める秋の月

實よ厭ふべき世の塵の

心よ染みし事をき

されど収め去屍からの

記るしの爲と側近く

建し石碑ハ今もあり

文ハ拙く彫りざまハ

醜いとてもたび人の

憐を等で惹かざらん

碑面よ彫る名に年齢よ

記しハ文字ハ拙くも

記念の巧は有そかし

又有かたき經文の

四十七

文句を引てにりたるの 人よ無常を論ず爲め
 蓋し此世よ生れ來て 程なく死する其時よ
 別れの惜しき事もなく 浮世の花の榮江をは
 心の外よ打捨て、 去行く人のなかるべし
 眼の光り止むときは 戀しかるらん身の族ら
 魄しひ体を去る時ハ 痛く慕はん妻子とも
 たどひ焼くとも埋む共 人の思ひの消にはせじ
 偕 又此よ古人の 謂れは書けど余とても
 いつか歸らぬ旅よ立ち 過ぎ行く後の世の人の
 如何せしやと思ひやり 尋ぬる事も有ならん
 しからん時ハ此先の 頭よ霜を重ねたる
 老人斯くぞ曰ふならん 我儕ハ彼れが朝早く

五十七

昇る旭を見ハやとて 岡よ登るを常よ見き
 又彼處なる川端の 枝伸の垂し山毛櫟みなの木の
 蟠かまりたる根の側よ 身を横たへて晝いこひ
 流るゝ水よ打臨み 其常なきをかこちてん
 又彼處なる常葉木の 木立の下よさまよひて
 頭ら傾け腕を組み 知る人なきの歎かき
 と、かぬ戀の口惜しさ 世のうさ杯を啣ちけん
 去るふ一日ハ彼の人を 慣れし岡にも樹陰よも
 絶て見る事あかりけり 其翌朝よなりぬれど
 野よも森よも川邊よも 身をハ現ハき事そなき
 又其次の朝ほらけ しかばぬ送る歌きけば
 正しく彼れの爲なりき 君ハ字を知る人なれハ
 彼の山さんさんの陰にある 碑文を讀みて識り給へ

碑文

土を枕しこの下よ
 富貴名利もまた知らず
 哀れ此世を打捨て
 仁恵深き人なれば
 愛き人見れば涙くみ
 獨りの友の有しとよ
 是より外よ此人の
 尋るとても詮のなし
 後の望みをいたきつゝ
 鳴呼正成よ正成よ
 黒雲四方よふさがりて
 惡魔の天下を横行し

○小楠公を詠えるの詩

身をかゝるたる此人は
 學ひの道も暗けれど
 あの世の人と成りけり
 天め憫み報ひけり
 (外小詮すべなき故よ)
 (外よ望のなかるらん)
 善し惡し共よなほ深く
 たましひ既よ天よ歸し
 神にまぢかく侍るなり
 公の逝去のこのかたの
 月日も爲よ光りなく
 下を虐げ上をさへ

慢とり果て上とせす
 絶る間のなき人馬の音
 芳野の山よ花見むと
 君が御代こそ千代々々
 いづれの時よ有なるや
 嗚呼大君の御爲よ
 この世の塵を洗ひむと
 遠くあなたを見渡せし
 雲の上まで屹立し
 見ゆる菊水の其旗の
 父の賜ひし此刀
 賊の頭らを斬らせむ爲
 國の仇なり父の誓

吹き來る風は醒ぐさく
 春の來れども花咲かす
 訪ひ來る人の絶てなく
 嘯る鳥の聲聞の
 嘆かへまきの至りなり
 振ひ起りてけかれたる
 する人として非ざるか
 金剛山の巍峨として
 繁る林の木の間より
 實にこそ國の寶らきり
 腹をきれとの爲ならそ
 憎さもよくま彼の賊等
 斬て捨すよ置くべきや

拂へん來たる夏の蠅
熟ら思ひめくらせば

頃は正平・成子の春
元來よわき此からだ

若しも病よ冒されて
不忠不孝と誹しられむ
死出のなこりよ今一度

空しく失せし事ならば
討死するは此時を
願ひかなひて親面たり

君の御影を伏し拜み
聞て切なる胸のうち
書き残したる梓弓

生て飯れのみことのみ
哀れといふも愚かなり
引きてかへらぬ赤心を

誓ひし者ハ百餘人
物ともせきよ斬まくり
討死せしはいさぎよく

雲霞の如き大軍を
君の方をむ枕して
勇しかりける事共なり

都も遠き村里の

女わらへよ至るまで

忠臣孝子の鑑そぞ
天地と共よ傳はらん

譽る其名は香しく
天地と共よつたはらん

○代悲白頭翁歌

都の錦桃櫻

大竹美鳥

移るめて行く乙女子が
露の命の果敢あさを

花の色香の日よそへて
散り行く花を打眺め
かこつともいと、哀あり

暮れ行く春よ花散りて
眺め見あかぬ我心
花は今年よ變らぬを

木々の梢を緑りぬ
又來ん春を思ひやる
身の行末を忍むる、

常葉の松も柚人が
賤が伏家の薪なり
青海原よありきてふ
過にし春の曙よ

斧よふるれば忽ちよ
桑の畠も年ふりて
事さへ人の云ふをかし
花見し人を今ハなき

今もてはやす諸人の
 風を怨みて中々よ
 春毎よ咲桃櫻
 今年も去年よ變らねど
 今年ハ去年より古よたり
 如何にわれらは言告ん
 花の顔月の眉
 哀れ翁よありよけり
 幼けなかりま其日には
 戯れ遊ぶ舞の袖
 光り輝く高樓よ
 樂しく暮す月と日の
 昨日の淵を今日みれを

行術も知らぬ花の風
 身の古行くを思はさり
 色も同しく香も同じ
 變るハ人の姿あり
 又來ん春ハ如何ならん
 我も昔しハ汝が如き
 今ハ頭よ霜おきて
 哀れ汝も赤心せよ
 木の下影にうちむれて
 風小散行く花の色
 天津乙女の歌みして
 流れず早き飛鳥川
 瀬小變りゆく我姿

病の床よふし柴の

戸はそを叩く人そなき

花の顔月の眉

うつろめてゆく世の習

縁の髪を今日見れば

越の國ある白山の

頭は白く青柳の

腰ハ梓の弓なれや

過よし事を今更に

思ひ出れば中々よ

千々に物こそ悲しけれ

入相告る鐘の聲

時よ歸る村雀

實よ常なきは世の習ひ

○寒村夜歸

小川健次郎

我を襲へる九折
 浪來る月の片われは

登るも暗らぎ杉村を
 何地なりけん鼻の

つらさをり

草木も眠る丑三を
 遠寺の鐘の音凄く

あれし道とて只ひとり
 小笹を渡る夜嵐の

聲より外に友もなし
 住めば都の閑がしき
 糞の門よへつらひて
 まけぬ重荷を負ひ擔ぎ
 苦痛はしらで春の花
 秋の鹿の音月雪と
 我もの顔よもてあそふ
 自らゆるるゝ友も亦
 貴人も知らぬ快樂の
 謳への返を谷の山彦

斯る淋しき土地なれど
 車の塵もろゝらねば
 名利よ追われ牛馬に
 我と我身よ使はるゝ
 夏は笠や郭公
 四時をりくゝの景物を
 身は昭代の樂材をと
 飄一ツよ王公や
 多き此身を神に謝し

○西詩和譯

大竹美鳥

此詩原フレントハートノ作ニシテ謹々三章一百字妙味蓋

言外ニアリ今之ヲ譯ス譯語ノ拙ナルヲ以テ原詩ヲ推ス
 勿レ

暴風に雨を吹きまかせて
 海面さこそと思はるれ
 今日ハ漁業休みなん

最すさまじき聲をなり
 岸うつ波の音高き
 嗚呼畏ろしき聲斗り

右一章
 獸の踪を尋ねんは
 岩間よ咬る獅子もあれ
 今日ハ山獵休みなん

いとく難し今日の空
 谷間に嘯く虎もあれ
 嗚呼畏ろしき聲斗り

海よ幸ある舟子ども
 市よ販れのは如何に
 此所も彼所も怪我人の

右三章
 山よ幸ある獵男ども
 さきの地震よ家つぶれ
 嗚呼畏ろしき聲斗り

○詠史

武士の石すねと名もたへつゝ、其名かれせぬ楠の木はや
 まと心のくもりなく君よつらへて國のためあかさか山よ
 たてこもりあるは千早よ吹をろきをろしの風よかたきら
 はたまよもあはきちりくゝと散行きよけりつかの木のい
 やつきくようちよせて又引かへし攻め來れば今のかざ
 りよ死あざやと心極めて櫻井の里よかはれる言の葉を子
 よ教へつつのこし置其身のやかくつはものをうちしたか
 へて湊川そこをふかみて赤心よ謀りし事もあわとなり消
 へて戰の敗れとる豫てかくろと空よ滿つ倭心の三吉野の
 花と散てし憐れさを早くも仇の傳へ聞き暫時しまごろむ
 夢をさへ驚かなんとむらきもの心をつきて君が爲盡き心
 いたゆみなく家よ傳へしみとら一の梓の弓のなきかす小
 いるてふ事を記るし置吉野の山よかはれるも實よたくひ
 なき丈夫の親子のらからのこらをも國を枕よなしてける

赤き心を今も世よ傳へ聞くだよ身もさぶくなりふけるう
 も適へれますらを

反歌

古まへをさしくまれけり湊川

世よ流れぬる名を慕ひこゝ

世を経つゝ朽せぬ名こそ楠の

石となりぬる記しなりけれ

元治のししめの年都事ありしより此うた公のおはん爲
 よ命うしあいし人々の祭り行ふとて讀める

○用忠魂歌

從三位

毛利 元徳

かくなへて過よしかたの年よめひ十あまりみつそのか
 みの空にあやしき雲おこり大内山を立こめて光りさやけ
 き天つ日をおほひ曇らしとこやみとあせるを歎き我いへ
 よつかへし人ら赤心よおもひはかりてもとかしはもとの
 とくに九重の雲井の空をさやかよも拂ひてしかと言たて

うち出しものを其ことのならずてつひにその人も都の
野へのしと露と消よけりかもその身ハ一きへ果ぬれとほ
ともなく其人とものかはりつる事の如くよいよしへよ大
まつりことかへりつるもとをたとりてあわれく此人と
もの大君の おほみためそと玉きはる命捨よしねこちより
なれりともへは已れらかかく明らけき大御代の みいつく
しみよあふこともこの人ともこの國のためめとし置つるい
さをしと千歳のうちよかとりつかま

反歌

雲晴てさやけくなれる天つるを

あふぎもあへき失し人はも

あた波をかへしもやらて徒らよ

屍ねみつさし人ぢかあまき

新体詩歌第四集終

新体詩歌第五集序

形象粲然皆ナ寫シ出スヘキ者ハ玻璃鏡ノ巧ナリ清濁ノ音互
ニ和スヘキモノハ大筒琴ノ妙ナリ夫レ玻璃鏡ノ寫大筒琴ノ
和巧ハ則チ巧矣妙ハ則チ妙矣然リト雖モ長ク其ノ形聲ヲ留
ムル者ニアラサルナリ今ヤ二者ノ巧妙ヲ兼テ數千百歳ノ後
ニ垂レテ而滅絶セザル者アツテ存ス焉其レ唯、詩歌カ紀伊人
竹内君洋ノ東西ヲ問ヘス時ノ古今ヲ論セズ諸名家ノ詩歌ヲ
網羅シ嚮キニ既ニ四集ノ編アリ命シテ新体詩歌ト云頃ロ又
第五集成ル卷ヲ開ケハ則チ粲然煥然然シテ以テ目ヲ喜ハス
ヘキ者アリ鏘然鏘然以テ耳ヲ娛マシムヘキ者アリ千様万態
一ニシテ足ラス其他聲律ニ應シテ而性情ヲ寫ス如キニ至ツ
テハ能ク鏘琴ノ寫ス能ハサル所ヲ寫ス者而喜怒哀樂不平無
聊ノ意見ハル焉玻璃鏡モ其ノ巧ヲ賞スルニ足ラス大筒琴モ
其ノ妙ヲ擅ニスル能ハズ詩歌ノ聲形百世ニ傳ヘテ而益高明
ナラントスルナリ嗚呼後ノ此ノ編ヲ讀ム者魚龍曼衍ノ戯ヲ

觀ル如ク黃帝咸池ノ樂ヲ聽ク如ク心目眩亂精神暢奇ト稱シ
快ト呼ヒ樵漁女ノ愚ニ至ルマデ皆ナ詩歌ノ樂シムヘキヲ知
ラン詩歌ノ樂ムヘキヲ知ラハ漸遙カニ學門ノ墻ヲ望ムヘシ
然ラハ則チ此ノ書ノ出ツル天下ノ文運ニ關スル輕カテス矣
其ノ体裁ノ如キハ舊樣詩歌ノ解シ難キニアラス極メテ簡易
ニシテ皆其ノ趣キヲ新ニシ別ニ生面ヲ開テ人ノ意表ニ出テ
名テ新體詩歌ト云フ固ヨリ其レ當レリ矣序ヲ徵スルニ及ヒ
再三辭スレトモ得ス終ニ書シテ以テ其責ヲ塞グト云爾
干時明治二八歲癸未八月中浣

晴民 首藤次郎識

新體詩歌第五集

嶺谷 竹内 節 編纂
晴民 首藤 次郎 校閱

○世渡りの海

小川健次郎

宜も出来たり實りたり
わけて今年この秋の秋穫とみを
又とあらしむ國本も
爰よかゝると聞からふ
まき返しても長き日の
それのみならず霖雨なみや
夜の目も寐ひきに引板ひたの番
野分の風の無慙むぜんやを
世の常なきを啣くはつより
嗚呼六づかしの世渡や
物うる業わざなむかしこそ
國の光も身の幸さいちを
非じときけむ矢も楯も
輸出輸入の平均や

往來の人も稻のなみ
見れば農ほごよき業ハ
こゝに基ぬま民命も
劔をうりて鋤をかひ
腕も肘もぬけさうよ
早はやよ水のかげ引や
さるよ一日野も山も
泣くにもあけき取分て
外せうよ詮術せんじゆつなかりけり
賤しといへど今の世ハ
もとむる道もこの外せうよ
ハや溜らじと投げ捨て
彼かよ得られし商權しやうけんを

十九

取もどきんと健氣ある
あへなく外れ優幕の
賣れば借られ買へば損
きへて果敢なき雲霞
世の常なきを啣つより
嗚呼六づかしの世渡や
棹一本に浮々と
遊びだてらよ渡らるゝ
危険を怯ぢき畏れせよ
日頃の伎倆顯へすの
よるべき墓を求めねば
共よ根のなきうき艸の
誘ふ人なき身の不運
月に輪き花よ酔

胸算用の正鵠は
設け處が埒もなく
杖と頼みし資本も子も
あらしの庭の花紅葉
外に詮術なかりけり
此所の泊りや彼所の港
舟子も暴風の危険あり
名譽の海に乗り出し
いと易けれと夫とても
よし覚むとも其墓も
憂き艱難をよそよ見て
はり裂く胸を押鎮め
流るゝ水を友として

一十九

世の常なきを嘆つより
世わたる業の多けれと
つきて廻るは諺の
おなじ羽色の蝶鳥の
其生活は習ふより
傍目をふらせ一せらに
又あまよりと工夫して
其熟練の遺傳とよ
勵み進めをわのすから
一日と樂に傍目より
嗚呼いとやその世渡や

嗚呼六づかしの世渡や
彼よ利あれを此は害
畔を走るも田を飛ぶも
おろろ事よ細虫をら
なれし手業を怠らず
明日のけふより明後日の
祖先の立てし計畫と
光りを加へ漸くよ
我をしらきよ一日より
羨むこゑをきく時の

○夏夜即事

晝の暑さゆふ立よ
ろろやく月よ置わたす

小川健次郎

あらしひ流して茶高く
千草の雪のはらくと

二十九

玉を欺く玉たれの
いとも涼しきむら竹の
疑ふばかりおど細く
千ひらの金と一刻を
猶明け易き夏の夜の
口さかなくも思かよも
蚤蚊や蠅と打つけよ
おもひを焦す螢火や
しのぶ軒端の橘よ
訪ふ人もなき草の戸を
物の哀れをゆめよだよ
静に観れば四ツの時
われを慰め樂いまそ
今日のあたり覺へたる

小籬の返しよ吹ちりて
菜越に秋や來ぬるりと
庭の篋もきこゆあり
惜みし春の宵よりも
價を誰かさたむべき
夏へうるさし又暑し
眩ていふはいはずして
昔の人の袖の香を
はつねをもらす郭公
叩く水鶏よやぶらるゝ
しらで寝過さ人あらん
うつり變りて物ごとよ
深き方便をゆくりなく
其嬉しさと樂しさを

つゝもとまれを夏衣

吹返したる峯の松風

○送學友歸郷歌

大竹 美鳥

五年六年 諸共よ
互よ勵みはげまじつ
光のどげき春の日や
五月雨晴れぬ夏の日も
いと樂しく過しけり

同じ學びの窓の内
慰められつ慰めつ
月かげ清き秋の夜や
雲ふりしげる冬の夜も
いと樂れり暮し鬼

三十九

月日の流れ早くして
昨日諸共住みなれし
明日の旅路に出船の
かしまだち今祝ふなり
いざやほせし其酒を

五年六年とく立ちて
學びの舎を出たりし
ともなり師なる君達の
祝の酒をまゝむなり
いざやくめし此酒を

四十九

歌へや舞へや皆共小
今日を限り明日よりハ
敵といふハ忌言葉
難きも難き事ならず
聲をも雲非よ上るなる
さハいハ心有明の
行衛思へばうさてやあ
朝ハ浅間の烟リかも
天と地との間をば
隔てハあらじ西京

舞へや歌へや諸共に
又逢ふ事の易きやハ
雲をも排く心あらむ
月の前ゆくほど、きす
あれ見よ高く上るなる
月影かくせ村雲の
浮世の事ハ似たる哉
暮ハ鞍馬の霞みかも
家となしつゝ過る身ハ
北も南もみな同じ

五十九

斯くして後に思ふ事
風ふき拂ふ雲間より
嗚呼面白の景色やな
明日の別れの最つらき
取れや人々酌む酒の
深き契りを忘るるあよ
月もろ共にやまらハて
○見三燭蛾一有感

かなふ若とよ見よや人
月ハ山たり顯ハれたり
そぞろうき立つ思哉
愁を掃ふ玉ハ、き
つきぬためしも有磯海
寝ずもあれや今宵一夜
歌へや舞へや明るまで
犬山居士
文書かんとて我庵の
燈ともせば庭の木の
衣を通しふくにつれ
翻めき來り燈みて
見れハ悟の有磯海
守らんとする事ぞある

抑も難を企つゝ
又其本を見ざりせば
等しき業やなすならん
取まくするの愚をらすや
なさまくするの愚なり
其身失せては遂ぐとし
しめて其身を焼もせせ
進みて後よほまれ得て
名譽の人と呼んれん

○湘南秋信

昨日けふと思ひしも
旅よのなれぬ苦しさよ
雲の通路断にせども
あきは来ふけん友便り
偶よのあれど其さへも

悪きとよのあらねども
今しも来たりし蝶々の
焼ても思ふ其火をば
死しても難き其事を
其身ありてぞ事遂ぐる
されば撓まぬ心をば
死しもなさぬ道をとり
後よ鑑を残さべき
名譽の人と呼んれん

鈴木券太郎

早一月の旅衣
眺むるもの空の雲
断にくなる文の面
あさては又親や妹
悪事のけて何もかも

有る者としては無りけり
いかよ見物か其とても
泣よなかれを兎や角と
知るや知らずや秋の霜
哀れを見舞ふ氣合なり
あるは馬入よ馬を信
大和心のやる瀬をき
都の人にしらせんも
今年のみより豊けさ小
来るや春の事までも
君が代なれや有がたし
田舎の住居よし然かも
酔て管まく其代り

晴民評云句精巧押韻自在敬々服々

まいて王子の紅葉だも
想ひやるのみ詮術も
案じ暮きは愚かとも
千州にかより照月も
木の葉の落る音づれも
または雨降ふ雨よ菰
思案なげ首池の鳧
外よはあらじ是のそも
民の命のかゝる紐
嬉しく思ひ云まくも
白きを語る丹き肝
露の恵みの深さよも
東京の摸様知らせれも

○チャールリス、キングスレー、氏悲歌

外・山仙士

無常を告ぐる入相の
 三人の漁夫の帆を上て
 走らす船の進めども
 心の中へ皆同じ
 沖ぞ向ひてイめる
 まうけは薄く子澤山
 洲に打掛くる浪の音
 稼がよやならぬ男の身

鐘の音をたそがれに
 入る目を指て西の海小
 妻子の爲よ引かざる
 父の出船を眺めつゝ
 童子の外よ餘念なし
 雨の降る日も風の夜も
 最とすさまじき其時も
 袖のひぬのは女子の身

三人りの漁夫の妻三人り
 鐘もほのかよ聞ゆれば
 火を挑んと立寄りて
 窓の戸開けて眺むれば

日も西山よ入相の
 共の籠りし燈臺の
 つまめる心の夫思ひ
 驟雨やら暴風やら

○詠松島歌

遠藤信道

空打過くるむら雲の
 暴風は如何よ吹けむとて
 洲よ打掛る浪音の
 稼がよやならぬ男の身

朝日うや砂磯に
 残るの三つの屍を
 飯らぬ旅よ門出して
 髪振り乱し取すがり
 目よ當られぬ風情なり
 袖のひぬのは女子の身

一日も早く樂をせん
 寄せ来る浪の碎けつゝ

色黒々と物すこし
 水嵩の如何に増ばとて
 如何程すこく聞ばとて
 袖のひぬのは女子の身

潮引き去りて其跡よ
 三人りの漁夫の妻三人り
 飯らぬ夫のなきがらよ
 消る計りよ泣き入りて
 稼がよやならぬ男の身

一日も早く世を去れば
 屍の跡の砂磯に
 鳴り漕や鳴れよと儘よ

島へしも許多あれども浦へしも多よあれども陸奥の松

○古

島の浦へ島がらか 眞細か島 浦柄か 愛き浦其浦の 小島
 の崎ゆ 打見る島のさきく 揺見る 磯の崎ふちを 船浮て
 御らひ見れば、小女の 眉曳なまて 寶が崎へ 南へ奔り 鹽
 尻を伏たる如く 富山へ北へそより 西へ空 振放見れば
 飛鷹の 大山をびへ東を顧みすれば 宮戸の蛇窟峯立りと
 ちくくの 其山の間小 百八十の島こそ並べ 夕煙 霞の浦
 淺緑青柳の島へ 時自久よ春めく島か 久方の月見の崎 茜
 指桂の島へ常しへよ 秋立島う火打島 附木の島へ 夏の夜
 に 海士の焚なる 漁火の 残れる影う 風凜る寒風澤の端と
 浪騒ぐ 鹽島の磯へ 嵐吹 冬の餘波か 玉手箱 二子の島へ
 二並び 睦しみ見ゆ 丈夫の 鎧の島 武夫の兜の島へ 彌猛
 く 雄々しくみゆ 腰細く 天女の島 白髪附翁の島へ 宜しけ

く 向ひて居れり 八千矛の大國島小 鯨釣夷が島へ 兄弟か
 並ひて立り竹の浦來よる 白王 福浦よいよる 玉藻を 深海
 松の拾ひてあれを 潮垂る 菅屋の汀 あひしとも 海人の思
 はき 盗んと人へ 離言 崎見れば 豊に立て物掠む 懐もあし
 蛇崎と人へ 離言 崎みれば 長閑く 出て 物ら吞さかむ 口な
 し 雅士の墨齋の嶋 深島の 濤きが浦と 風雅に負る島の名
 ふさはしく 負るうらの名 うべならべな 松島の浦へ 眞細
 き島の 眞秀島 愛き浦のし 眞浦と 神代より 今の現よ 語
 繼言 繼けらし 丸木船 榜もとほりて 萬段 顧みききと 見
 る 毎よ 飽ぬ島かも あかぬうら島

反歌

松島の八十島かけて 漕行ば
 浪の穂のへよ 黄金山見ゆ

○佐久間象山の請居の歌

佐久間象山

信濃路のひなよのあせを　うらくはじやまよものよはる
されは　いなさををり　秋つけは紅葉よはへり　そをめで
のゆき山を　あつま日のくるもしらず遊ぶなる人
もさはなり　かれども　さくらふるみの春の野の花もか
ざさず　秋山の　紅葉をも見き　たらちねのはぐのかふこ
のまゆごもりこもりてながく　年を經よける

反歌

君がためたちはしりせむすべをなみ

あつらよはひのおらくをしも

○西南の役より凱陣せし人を祝するの歌

久方の　空も長閑よ　あらし玉の　春を迎へて　秋津島　風も静
よ神ひつる　程もあらせず　武士の　八十氏川よ　立さめぐ
波のよるひる　いとまなく　君の臣を引連れて　臣の君も

従ひて　軍の庭よ　魁りけて　打つ討れつ　そがなかよ　實よ
いやましき　大丈夫の　わかきはらから　二人りづれ　向ふ矢
庭に　飛くるは　雨か霞か　白漣の岩をも碎く　墨鐵の玉よ當
りてはらからは　世よなき人となりよきを　古郷人は傳
へ聞き皆打守りて　歎きぬる　折りし事なく　歸り來てめぐ
り逢瀬の　ありけるは　ますらたけをの　深きよき倭心をし
ろしめず　弓矢の神の恵みよて　いさを　世々よ遺すなるら
ん

反歌

くろがぬの玉もとほらず大丈夫が

君よつかふるやまと心の

○詠石菖歌

滋野貞融

かほよそもの御國よありながら　の名なく漢籍よ見
ねくるその名をもちぬるたぐひかすすくあからやまもあ

る石菫のたゞのひとつなるべしかゝるさぐひは文詞よこ
 そ石菫なごかきもすれ歌詞にのよむべきならねばそのた
 らいよつきてあやめ草といはむからよたれあらやせしも
 いひてうべなはざらむしかはあれどなほまざれぬべけれ
 ばそのいはほよふふるよつきて私よ名つけて岩あやめと
 いふそのうへかしてに縁劍真人また劍脊草などいへるも
 をかしかれをこゝよもまたの名をつるぞ草とやいはまし
 山本晴香石菫をおくれり字を正宗まきむねといふこれなむわが家
 の正宗なりけるうくいふの天保八年水無月
 古の道踏學ぶかたのらよあま手のなさまむつるざたちとれば
 をいまぐそのよほひみればおろしく村肝の心のゆきぬ神代
 よりこのつるざとちつくるてふ人のおほけれ人の世のよは
 末ながら録倉の正宗こそ此道の聖ひじりなりけれそのおしへう
 けつかひてし義弘の亞聖いしよのたつしり則重のかりけりわが家よ

もちつたへに義弘の作れる太刀のわかゝりしほごのまさ
 びよつくよつるものよしあれば此道の物識人にしめすべき
 ものならなくふわれひとりめでゝこそあれ源のはるかの子
 とふみやびをもちつたへよし則重がつくれる太刀のわか
 しての川中島よますらをの名をとゞめたる山本の老翁おきながも
 のかも遠祖とほつざふの名代とあがめ今の世の人ふしめせりわれさへ
 もみれをうるのしうるのしきわがはらからのつらよしあれ
 ばこの子らが親としてへ此道の聖といへ正宗がつくれるこ
 れはゆめにたよ見まくほりそれいかにして見るとを得むい
 かして手よふれむとつねよしをもへるをのが心をばし
 る人ぞしる窓の内うちにそのひめもたる岩あやめ草のあはけれ
 いつのよよいかなる人のるさびふか名を正宗とたへげむ
 つゝきなしたるつるぞ草われよおくれりむなかなたの縁を
 しくのがたのもしろくにほへり朝あしたに眞清水たゞへそのさ

まのよほふをぞ見る夕ざればともしびかゝげ其つゆの玉を
こそ見れ正宗かそのしらねども末の世のきがたにのあらそ
これを見る我こそよろこそみな人の得がてよすとよ正宗を得
しこゝちちあれ枕大刀たちふならべていよへの道ふみまふ
ぶらたのらよこれをいおきてつねよかも見ん

新体詩歌第五集終

新体詩歌跋

登_レ高必從_レ低焉行難必從易焉故治_二天下之事物_一必有_二順序_一
々々何那曰當_レ行_二事物_一之日不可_レ必欠_一者恰如涉_二河海_一
必用_レ船舶也夫助_二國家開明_一進_二人智發達_一則在_レ于_レ學矣雖
然學有_二難易_一故初學修_レ之隨_二其順序_一從_レ易及_レ難而勉_レ之則
易_レ覺而易_レ學也然余觀_二察當時人情_一百事唯期_二速成_一不_レ願_二
其順序等_一直學_レ難而措_レ易所以其困難不可_レ言於_レ是乎遂半
途而挫_二折其志_一不_レ達_二目的_一者甚多矣譬若_レ登_二梯子_一追_二序

隨_レ段而不_レ踏_レ之直將_二飛越達_一其上則有_二陷墜之憂_一而無_二
上達_一焉夫然則豈焉得_レ為_二國家開明進步之裨益_一哉方今我
國行_二民間_一彼俚歌俗語是其最易々耳兒童謠_レ之走卒誦_レ之而
猶感_二發人心_一不_レ鮮少_一矣然未_レ有_二我國翻譯泰西之詩歌_一而
公世_レ焉是余等所_二常為_一遺憾也今也竹内君有_レ志_レ干_レ此蒐_レ
集係_二諸大家翻譯_一之泰西詩歌與_レ我本歌_一而名曰_二新体詩歌_一
既有_二第四集之編_一焉今又第五集編成示_レ余且徵_レ厥余受而誦_レ
_レ之風調温雅能得_二其体_一而語甚不_レ高一誦_レ之解_二其意_一也而
熟讀玩味則覺_レ字々有_二慷慨_一句々如_二金玉鏘曼_一餘音嫋々意
味益深長_レ然而一章快_二一章讀未_一半不_レ覺拍_レ掌曰噫是真天
下之歌快也余前所_レ謂俚歌俗語猶感_二起人心_一不_レ少然況於_二
此集_一乎一流_二布民間_一則感_二動人心_一發_二舒其志氣_一而人必抱_二
進取之氣象_一至_レ遂探_二學文之深奧_一以進_レ我國文明之度_レ昭々
明_レ於_レ見_レ火矣然則此集益_二於世教_一果幾許哉感激之餘聊述_二
鄙言_一以為_レ跋

千時明治癸未八月上浣唇交櫻陵居士

廣瀬要人識

明治廿年三月七日 翻刻御屆

同 年四月 出版

定價五錢

編輯并
原本人

和歌山縣士族

竹 內 隆 信

北都留郡甲東村
百十一番地寄留

東京府士族

翻刻
出版人

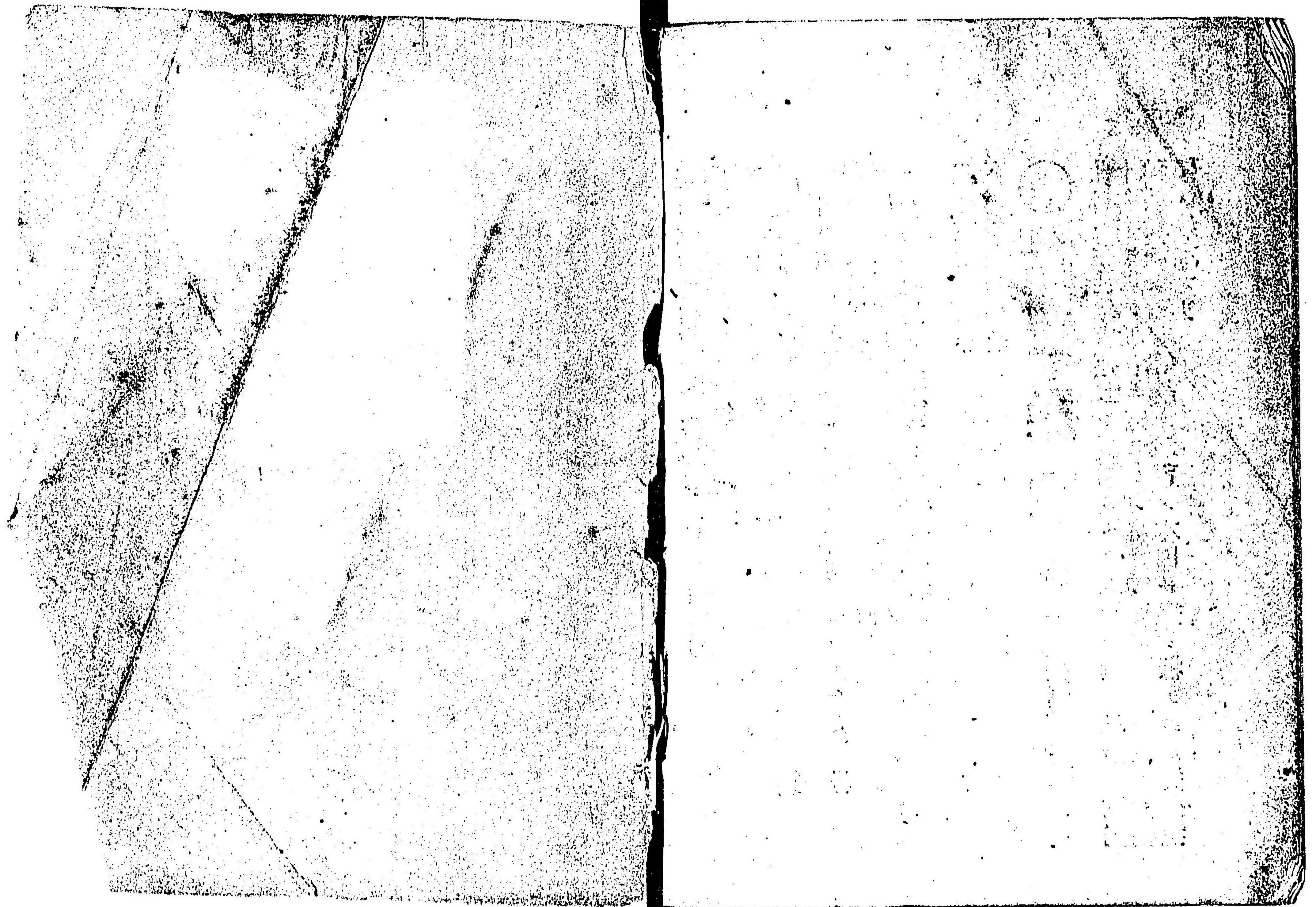
吉澤富太郎

本所區松井町
三丁目十番地

發賣

開 文 堂

本所區松井町
三丁目十番地



大日本教育會書籍印

第六室

一冊	號	四架	二函
----	---	----	----



088008-000-7

特63-914

新体詩歌

開文堂

M20

DBG-0105

